

「クローン病手記」 T H 24 歳

2013年11月14日

クローン病闘病記途中経過

I、はじめに

自分がクローン病と診断されたのは、2013年10月2日でした。クローン病と診断される前に、痔瘻に罹患していて、根治手術をしました。まずは、その経歴と自分が松本医院でクローン病の治療をして行くにあたっての経緯を書き綴って行こうと思います。またクローン病や痔瘻の事についても詳しく書き綴って行きますので、参考にして頂ければ幸いです。もちろんクローン病の症状については、人それぞれです。症状が当て嵌る方やそうではない方もいると思いますので、その点ご了承の上で手記を読まれて下さい。

(現代医療において、公式に認められている病名は22000種類近くあります。本来病名というのは、何のためにつけられるものでしょうか？医者どうしが患者の病気を治すために、共通に病気の原因を認識し合い、病気を治すためにつけられるべきものです。ところが近頃は、病名をつけるのは医者どうしが病気を治さない医療行為を通じて、患者を一生苦しめるために存在するようです。ワッハッハ！病気は医者が治すものでもなく、薬で治すものでもありません。免疫を抑える薬しか製薬メーカーは作れないので、永遠に病気を治すことができないのです。その最たるものがクローン病であり、潰瘍性大腸炎であります。ひとたびこのような病名をつけてしまえば、医薬業界の指導者でいらっしゃる高名な先生方が、永遠に医薬業界が儲かるシステムを作り上げた医療システムで全ての医者は動くものですから、まさにクローン病という病名はそのシステムによって生み出された典型的な病名といえます。というのは、クローン病という病名をつけてしまえば、『クローン病は原因が分からない、一生治らない病気である』というレッテルを貼り付けることができるからです。彼のような若い将来ある命を踏みにじり、医薬業界が病気を作り続け、ホクホク顔で金を稼ぐことに何の罪の意識も感じる必要のない残酷な業界が医薬業界なのです。残念でたまりません。38億年かかってできあがった全ての人間が持っている免疫の遺伝子によってしか病気は治せないのです。その免疫を痛めつける薬が病気を作り続けているのです。

皆さん、この21世紀の文明の世界の日本に、人が死ぬような病気の原因があると思いますか？もっとはっきり言いましょ。医学が全く無であった中世の時代に、黒死病といわれるペストがヨーロッパの人口の1/3の2000万人以上の命を奪

ったことはご存知でしょう。その後も度々ヨーロッパを襲った黒死病であります
が、今仮に日本やヨーロッパでペストが流行しても、誰一人死ぬ人はいないで
しょう。なぜならば、抗生物質がありますし、もちろん簡単にワクチンが作れます。
地球上から天然痘のウイルスも駆逐され、仮に天然痘にかかりたくてもかかるこ
とができないのです。仮に結核で死にたいと思っても死ぬことができないのです。
なぜならば優れた抗結核薬、つまり抗生物質があるからです。確かにアフリカな
どの後進国ではマラリアが跋扈しております。なぜならばマラリアに体するワク
チンも抗生物質も作られていないからです。熱帯に特有なマラリアにかかって死
ぬ人もいますが、先進国である日本や西欧においては絶対にマラリアにかかるこ
ともないし、死ぬこともないのです。昔から恐れられていたライ病や梅毒も日本
では見るのが不可能になりました。しかも、抗生物質があるので、仮にかかっ
たとしても死ぬことは絶対にないどころか、必ず治ります。昔から病気になれば
死ぬかもしれないと闇雲に恐れられていたのですが、この現代の日本では恐るべ
き病気、つまり死ぬような病気や治らないような病気は皆無になってしまったの
です。AIDSがあるではないか、と言う人がいますが、抗HIV薬ができたので、
抗HIV薬の合剤を使えば、AIDSで死ぬ人も現在では激減してしまいました。し
かもAIDSなどという病気にかかるのは、つまらぬことをするからです。まとも
な人であればHIVに感染するようなことは絶対にしないでしょう。

現在病気で死なない一番大きな証拠があります。若いうちに病気で死ぬことが
誰一人いなくなってしまうものですから、老人天国になってしまったのです。
現在は65歳以上の老人が3000万人を超えています。それは若いときに病気で死
ぬ人がなくなり、そのまま老人になってしまったからです。ガンは病気ではあり
ません。ガンは後天的遺伝子病でありますから、遺伝子病はどうにもならないの
です。さらにガンは老化そのものですから、老いて死ぬことを恐れることはない
のです。私もいずれガンで死ぬでしょう。当然のことです。

これほど治らない病気が全てなくなったにもかかわらず、なぜクローン病は
『原因が分からない、治らない』という言葉辞を医者が吐くことができるのでし
ょうか？この現代の世界の医学会が、文明に残された2つの病気の原因、つ
まり化学物質とヘルペスを絶対に認めようとしなないからです。この世に原因の事
象は何一つとしてありません。病気も必ず原因となる異物が人体に入って初めて
起こるものです。人体に純粋な5大栄養素と水と酸素だけが入るかぎりには絶対に
病気は起こらないのです。昔もペストや天然痘で死んだのは、これらのウイルス
が人体に侵入したからです。こんな簡単なことさえ医薬業界のお偉い方は絶対に
認めようとしなないのです。

それでは現代に残された難病と言われる病気の原因の2つとは何だかお分か
りになりますか？もう既に書いてしまいましたが考えてください。様々な化学物

質と8種類のヘルペスウイルスの仲間の2種類だけあります。皆さん、農薬や添加物だらけの食べ物をとりたいたと思いますか？様々な化学物質の入った水を飲みたいと思いますか？大気汚染物質が満載された空気を吸いたいたと思いますか？今日の新聞にも出ていましたが、中国で有害化学物質を含んだ濃霧が全国104都市に広がり、8億人あまりが呼吸困難になったと出ていました。呼吸困難、つまり気管支喘息も全て大気汚染物質が気管支に侵入し、それを排除するためにアレルギー性気管支炎を起こしていただけなのです。このような化学物質が人体に侵入して病気を起こす以外に、人類が消滅するまで人体のあらゆる神経に住み着いて人類を苦しめ続ける病気のもうひとつの原因がヘルペスウイルスなのです。これも世界の医学会は絶対に認めようとしません。ヘルペスについてはヘルペスのコーナーを読んでください。

面白い話をしてあげましょう。ヘルペスがあらゆる神経症状の原因であることを知りすぎた人物の話です。その人物とは東京慈恵医科大学の皮膚科の名誉教授である新村真人先生であります。彼は今から20年前頃は、日本の皮膚科学会を背負う大ボスであり、単純ヘルペスや水痘帯状ヘルペスの権威であり、立派な学者であり尊敬すべき人物でありましたが、30年前に起こったソリブジン薬害事件にかかわりがあり、名声を徐々に失っていった人物です。このソリブジンの治験に新村先生が直接かかわっておられたために、このソリブジン事件の責任を問う国会でも彼の名前が取りざたされてしまい、そのために彼の学問的業績や人物に傷がつき、同時にソリブジンも消え去って行ったのです。残念です。

このソリブジンは、日本で開発された唯一のヘルペスウイルスに対する極めて優れた抗ヘルペスウイルス剤でありましたが、このソリブジンと抗がん剤を併用したために、日本国内では治験段階で3人、1993年9月の発売後1年間に15人の死者を出しました。現在用いられている抗ヘルペス剤は、ゾビラックスやこの薬の後発品だけですが、はるかにこのソリブジンの方がゾビラックスよりも抗ヘルペス剤としては強力であったのです。このソリブジンが今現在使うことが可能であったならば、世界中の全ての人々が文明最後の病気の原因の一つであるヘルペスを増殖させないようにさせ、ひよっとすれば医者が必要でなくなっていた可能性もあるのです。このような優れたソリブジンがどのようにしてこの世から抹殺されたかのいきさつを述べてみたいと思います。さらにこのソリブジンと同一の抗ヘルペス剤を製薬メーカーが作ることを期待しながら、ソリブジンについても詳しく書きたいと思います。

新村先生が書いたヘルペス関係の書物は、今でも最も優れたヘルペス関連の教科書になりうるものです。1996年に阪大の山西弘一先生と編集された『ヘルペスウイルス感染症』を読めば読むほど、新村真人先生は原因不明の病気はほとんどが水痘帯状疱疹ヘルペスウイルス（VZV）によるものであるとほのめかされて

いると考えざるをえない文章に出会うことができます。この医学書はその当時の優秀なヘルペスウイルス研究者を結集して作られたものであります。しかしながら元来、新村真人先生は皮膚科の先生ですから、自分の専門領域を越えないような努力をされていたようにも見受けられます。

しかしながら、メニエール氏病や片頭痛や**Hunt**症候群などは全て水痘帯状疱疹ヘルペスウイルス（**VZV**）であることをはっきりと書かれています。**Hunt**症候群は、3つの症状から成り立っています。ひとつめが皆さんご存知のように外耳道の皮膚や耳介周囲の皮膚に見られる帯状疱疹と、2つめは歪んだ口が特徴的な顔面神経麻痺、そして3つめは耳鳴り、難聴、めまいであります。この3つめの症状はまさにメニエール氏病そのものであります！さらに別の項目では、ブドウ膜炎といわれる、虹彩炎、毛様体炎、強膜炎、網脈絡膜炎も水痘帯状疱疹ヘルペスウイルス（**VZV**）によるものであることをも示唆しておられます。さらに眼圧上昇による緑内障も水痘帯状疱疹ヘルペスウイルス（**VZV**）であることもほめかされております。さらに水痘帯状疱疹ヘルペスウイルス（**VZV**）が視神経炎を起こし視力低下をきたすことをも指摘されております。すごい書物です！

1990年代が新村真人先生の活躍の絶頂の時代であり、後一押し研究を進められれば、私が発見した病気の真実、すなわち文明に残されたあらゆる神経症状は、神経に巣食っているヘルペスと、人間の免疫の戦いである神経炎であるとお分かりになられたはずなのに、ソリブジン薬害事件をキッカケに、彼のヘルペスに対する真実の研究が徐々に途絶えて行ったのが残念でなりません。もちろん『ヘルペスウイルス感染症』の共編集者である山西弘一先生も、阪大で長い間ヘルペスの研究をされ続けたわけですから、私のような一介の開業医が知っている真実、つまり文明の残された最後の敵がヘルペスであるので抗ヘルペス剤を1年近く投与し続ければこの世から原因不明の病気のほとんどがなくなってしまうことは知っておられるはずですがね。実際そのような研究もされております。

ついでにヘルペスウイルスのひとつである**EB**ウイルスについて述べておきましょう。皆さん、風邪以外に乳幼児や子供や大人がよくかかる風邪に似た病気の原因はなんだかご存知でしょうか？それをお話ししておきましょう。風邪の場合は発熱が見られ、喉が痛くなり咳や鼻水や痰がでますが、咳や鼻水や痰が出ないウイルス感染症があるのです。これが8つのヘルペスウイルスの中の4番目のヘルペスウイルスにあたる**EB**ウイルスであります。**EB**ウイルスとは

“**Epstein-Barr Virus**”の略語であり、この**EB**ウイルスによって起こされた感染症を、ときには「伝染性単核球症」と呼ぶことがあります。この**EB**ウイルスは、**EB**ウイルスに感染している母親が赤ちゃんをキスしたり、大人同士がキスすることで唾液を介して伝染することが多いのです。唾液から口に入った**EB**ウイルスは口腔や鼻や咽頭の粘膜上皮細胞にまず感染します。さらに喉を囲んでい

る4つのリンパ節である、口蓋扁桃、耳管扁桃、咽頭扁桃、舌扁桃にいるBリンパ球に感染し、リンパ管を通じて全身に広がって行きます。

皆さんも時々血液検査で、「あなたの血液のリンパ球に異型リンパ球がありますよ」といわれたことがありますか？この異型リンパ球とは何でしょうか？Bリンパ球に感染したEBウイルスを殺そうとしたキラーT細胞や、ナチュラルキラー細胞（NK細胞）などのリンパ球であります。このような伝染性単核球症といわれる病気は、通常は自然に治癒するのです。よく発熱が続き、扁桃炎が腫れて、かつ頸部のリンパ節が腫れ続け、38度以上の高熱が1～2週間続くことがありますね。医者は原因不明と声をそろえて言いますが、実はこれもEBウイルス感染症である伝染性単核球症にかかっているためであります。ときには全身性にリンパ節が腫脹することがあったり、扁桃炎も続くことがありますが、化膿する扁桃炎ではないのです。なぜならばウイルスによる扁桃炎の場合は、化膿することがないからです。ただ、溶連菌による二次感染が合併することがあり、そのときは化膿性扁桃炎も合併していることがあります。

さらに付け加えておきましょう。皆さんもご存知のように、GOT(AST)、GPT(ALT)の値は肝機能検査であり、これらの値が高いので肝機能障害があると言われた人がいませんか？しかし「C型肝炎でもないしB型肝炎でもないので、原因が分からない」と言われたことがあるでしょう。これはほとんどの場合がEBウイルスによる肝炎であるのです。高いときにはGOT(AST)やGPT(ALT)が800ほどになることもあります。多くの場合はステロイドを長期に投与されたり、ストレスの強い生活に耐えるためにステロイドホルモンを自分で大量に出しているうちに免疫が低下します。その間にEBウイルスが肝臓の細胞で増殖し続けます。ステロイドで免疫機能を落とされたキラーT細胞やナチュラルキラー細胞（NK細胞）はその細胞を殺すことはできないのですが、ステロイドをやめたりストレスがなくなると免疫が回復します。免疫が回復するとキラーT細胞やナチュラルキラー細胞（NK細胞）が、EBウイルスに感染した細胞をEBウイルスもろとも殺すために、肝臓の細胞からもれ出た酵素であるGOT(AST)やGPT(ALT)が血中に流れ出て、採血をすればこれらの値が高くなっているのです。

EBウイルス肝炎は決して慢性肝炎や肝硬変や肝がんになることはないのです。なぜでしょうか？ついでに話を進めましょう。なぜEBウイルス肝炎が肝硬変を起こさずして、C型肝炎やB型肝炎は肝硬変を起こすのかについて疑問を感じませんか？完璧な答えを出すことは難しいのですが説明はできます。常々私が言っていますように、病気とは異物を免疫が認識し、その異物を殺すか、共存するか、封じ込めるか、殺さずに排除するかの4つの方法によって敵を処理して病気を治すことをまず確認してください。

皆さん、日本で一番の金持ちはソフトバンクの孫正義社長ですね。韓国人であるにもかかわらず、日本人に帰化し、自分の出自を証明する「孫」という韓国名を保持し続けているすごい男です。差別されている韓国人の多くは名前を隠して仕事をするか、ヤクザになったりする人も中にはいるのですが、孫正義氏は見上げた人物です。その彼がこれほどまでにソフトバンクを大きくしたキッカケは何だかご存知ですか？他のところにも書いたことがあります、彼は実はB型肝炎患者であったのです。今でこそ様々なB型肝炎ウイルスを殺す方法は開発されましたが、それでもなお完璧とはいえません。彼は今56歳であります、今を去る30年前に24歳でソフトバンクの会社の元を始めたのですが、仕事をすればするほど彼はB型肝炎の炎症を繰り返すために頑張りがきかなくなっていきました。その頃はインターフェロンもなかったものですから、どうすることもできなかったのです。そこで最後の手段をとったのです。今でも肝臓の大専門家である有名でおられる虎ノ門病院の熊田博光先生を訪ねました。「なんとかB型肝炎を治してください」と頼み込みました。熊田先生曰く、「非常に危険ないちかばちかの治療方法がある、命をかける覚悟があるならやりましょう」と言いました。

その方法は次のようです。大量のステロイドホルモンを孫社長に投与し、そして一挙にステロイドを抜くのです。この意味は何でしょうか？大量のステロイドで免疫の力を一時期ゼロにし、その間に大量のB型肝炎ウイルスを増やすのです。そして、一挙にステロイドを止めてしまうとステロイド離脱により、今度は免疫が一挙に回復し、肝臓の肝細胞で増え続けたB型肝炎ウイルスを肝細胞もろとも殺しきってしまう方法です。一挙に肝細胞を殺すとGOTやGPTが4000以上になり、ひどいときには10000を超えることがあります。いわゆる劇症肝炎を起こし、肝臓の働きが全くなり肝不全で死ぬことがあります。孫社長はいわゆるこのステロイド離脱療法に命をかけたのです。この治療法で彼の肝臓に巣食っていたB型肝炎ウイルスが免疫の働きによって全て除去され、健康な体を取り戻したのです。これをキッカケに彼はますます仕事に励み、トヨタに次ぐ株式の時価総額10兆円兆円前後の日本の株式市場2位の会社にまで育て上げたのです。すごいですね！しかも8兆円も借金をしながら、アメリカの通信会社のスプリントとクアルコムとBrightstarを買収してしまったのです。まさに彼が世界に鳴り響く経営者になれたのも、生死をかける肝炎の治療を乗り越えたためだと思われ

ます。

以上、孫社長のすごさを語るつもりもなかったのですが、要するに症状や検査値が悪くなるのは、免疫が敵をやっつけようとしているということを証明したかっただけなのです。死なない限りは症状がどんなに悪くなっても、実は心配することはないのです。もちろん死ぬか生きるかの境を見極めることが、医者にとって最も難しい仕事となるのです。私もステロイドの離脱を28年間やってきたのですが、今まで患者さんを殺したことはありません。しかしながら患者さんには

常々「死ぬ時にはステロイドを使わざるをえない」と念仏のごとく唱えています。

ちなみに孫社長のB型肝炎ウイルスの感染源は医原病であった可能性があります。確かにB型肝炎ウイルスの保菌者であった母親から出産時に直接感染した可能性もあります。(これを垂直感染といいます。)その真否はわかりません。

さらについでに述べましょう。どうしてB型肝炎ウイルスやC型肝炎ウイルス健康保持者といわれる人と、いつの間にか慢性肝炎、肝硬変、肝がんになる人と違いはどこにあるのでしょうか？これも簡単です。同じ肝炎ウイルスといわれるウイルスの仲間の間でも、遺伝子の変異して様々な遺伝子を持った変異した肝炎ウイルスがいます。繁殖力が強く、かつ免疫に対して強い変異遺伝子をもったC型B型肝炎ウイルスはどんどん増え続けます。そして肝臓の細胞をつぶしていきます。一方、健康保持者といわれる人のC型B型肝炎ウイルスは繁殖力や増殖力が弱く、肝細胞にすみつくことだけで満足している肝炎ウイルスなのであります。ちょうどインフルエンザウイルスについてもいえます。同じインフルエンザウイルスであるにもかかわらず、致死性の強い変異遺伝子をもったインフルエンザウイルスは怖いのですが、普通のインフルエンザウイルスは何も怖くないのと同じです。

それではなぜ、EBウイルスは慢性肝炎や肝硬変を起こさないのでしょうか？やはり増殖する力も人間の免疫に勝つ力もないので、ひっそりと人間の免疫から逃れるようにして肝細胞に住みつく遺伝子を持っているからです。ときどき人間の免疫が落ちた時にずる賢く増殖するのですが、すぐに人間の免疫に発見されて肝細胞と一緒に殺されてしまうのです。この時にGOT、GPTが高くなるのは既に述べました。どのようにヘルペスウイルスが人間の免疫から逃れるかについては、ヘルペスのコーナーを読んでください。

とどのつまりは人間もウイルスも全て遺伝子の設計図によってまず決められます。この遺伝子の設計図をONにするかOFFにするかの学問がエピジェネティクスであります。エピジェネティクスについてはここを読んでください。

何百回も書いているように、21世紀に残された難病の原因は化学物質とヘルペスウイルスです。化学物質はアレルギーや膠原病の原因ではありますが、最後は共存できるのです。ところがヘルペスウイルスは、殺すことも排除することも共存することも永遠にできないのです。それどころか、グローバルな競争社会においては国内的にも全ての人が否が応でも生きるために競争に参加せざるをえなくなっています。競争に勝ち抜くためにストレスホルモンであるステロイドホルモンが常に過剰に産生されざるをえません。そして自分の免疫を下げ続けざるをえないのです。この時に8種類のヘルペスウイルスは増殖しまくるのです。

しかも現代の医療は製薬メーカーが作る免疫を抑える薬を朝から晩まで病人は飲まされるものですから、ますます免疫が低下していきます。いわば、薬剤性免疫低下症を作るために製薬メーカーは薬を作り、医者はその薬を患者に投与し続けるものですから、ヘルペスウイルスにとっては人体に住みつくことは、天国で増殖し続けるようなものです。薬をやめてやっと免疫を回復した暁には、人間の免疫は増えたヘルペスと戦わざるをえないのです。生きるために休息の時間は短く、再びストレスの多い競争社会へと毎日出て行かざるをえません。ヘルペスと免疫の戦いは死ぬまでいたちごっことなってしまいます。

あらゆるウイルスを殺すことは免疫しかできません。ウイルスはDNAそのものですから、これから先もウイルスを殺す薬を作ることは不可能です。だからこそ少しでもヘルペスウイルスを増殖させない優れた抗ヘルペス剤が必要となるのです。その力が一番強かったソリブジンが市場から消え去ったことは残念でならないのです。

皆さん、線維筋痛症という病気を聞いたことがあるでしょう。原因不明の難病といわれています。さらにもうひとつ原因不明の病気とされているリウマチ性多発筋痛症もヘルペスであるのです。これらの病気の痛みに対しては痛み止めしか治療がないのですが、皮肉なことに痛み止めを飲めば飲むほどヘルペスが増え続けるという真実をどの医者も語らないのです。自分たちが病気をどんどん深刻にしていることがバレてしまうので、筋痛の原因がヘルペスであるということを絶対に言わないのです。悲しいですね、悲しいですね！単に単純ヘルペスや水痘帯状ヘルペスが増えているだけではないのです。ヘルペスウイルスの仲間であるEBウイルスやサイトメガロウイルス（CMV）のヘルペスもこっそり増え続けているのです。

ソリブジンが再びよみがえることを期待しながら、ソリブジンと今現在使われているアシクロビルの違いも述べていきましょう。さらに優れた抗ヘルペス剤であったソリブジンがこの世から消え去っていくいきさつについてwikipediaを参考にしながらコメントしていきましょう。

ソリブジン (sorivudine) は、ヘルペスウイルス感染症の治療薬で、特に単純ヘルペスウイルス、水痘・帯状疱疹ウイルス、EBウイルスに有効である。1979年（昭和54年）にヤマサ醤油により新規合成され、1993年（平成5年）9月3日に日本商事（現・アルフレッサ）（このアルフレッサは製薬メーカーではなくて薬の間屋です。）より商品名ユースビル錠が上市された。

（このヤマサ醤油は現在も千葉県銚子市で醤油や各種調味料や医薬品の製造販売を続けています。日本商事はこの事件後にアルフレッサという会社に吸収合併

されてしまいました。

ここで薬の呼び方について教えてあげましょう。ひとつの薬は3つの名前を持っています。化学名・一般名・商品名の3つです。まず薬は化学物質からできていますから、化学構造を持っています。この化学構造式をそのまま化学の決まりに従って読んだのが化学名です。この化学名は薬学者のような専門家だけが知っているといえます。医者も知りません。そして一般の人にはほとんど知られていません。そこでもう少し簡単に世界中共通して使えるような薬の名前をつける必要があります、それが一般名です。ソリブジンもアシクロビルも一般名です。ところが、その薬を一社だけが売っていればソリブジンやアシクロビルでいいのですが、同じ薬を違った製薬メーカーが商品として作るようになります。これが商品名として3つめの名前となるのです。一般名であるアシクロビルの商品名のひとつがゾピラックスであり、別の商品名がベルクスロンやアシロベックなどがあります。最初にソリブジンが使われたときの商品名はユースビルでした。つまり私たちが知っている薬の名前は、薬という商品を会社が作る時によく売れるような響きのいいように勝手につけたものといえます。)

エーザイが販売提携していた。なお、ブリストル・マイヤーズスクイブがヤマサ醤油より海外での開発・販売権を取得していた（商品名 Bravavir）。（エーザイは1年の売上が8000億円であり、世界の売上高順位は22位で、国内では武田、アステラス、第一三共に次ぐ4位となっています。同じソリブジンをブリストル・マイヤーズスクイブはプラバイヤーとして売りました。ブリストル・マイヤーズスクイブは今も健在です。)

効果・効能

ソリブジンは単純ヘルペスウイルス 1 型 (HSV-1)、水痘・帯状疱疹ウイルス (VZV)、EB ウイルスに効果のある抗ヘルペスウイルス剤で、当時のヘルペス治療の第一選択薬だったアシクロビル (商品名 Zovirax、Activir) より VZV へのウイルス活性は 2,000-3,000 倍強い。(アシクロビルとの違いが歴然としていません。2000~3000 倍もヘルペスを増やさなくしてくれるのです。このソリブジンが今健在であれば、線維筋痛症の痛みも、リウマチ性多発筋痛症の痛みも、簡単に消え去ってしまっていたはずです。) また、有効な治療方法がない EB ウイルスにも効果がある。(この効果こそ、上に書いた EB ウイルスの様々な症状をとってくれるのです。残念です。こんな優れた薬を 100 億単位の金を使って開発製造したのにもかかわらず、水の泡となったのは本当に残念です。)

消化管吸収に優れ、消化管から吸収された後は大半が分解されることなく尿として排出される。

帯状疱疹に対する服用量は成人 1 日 50mg3 回で、アシクロビル内服 (1 日 4g) の 20 分の 1 以下である。

アメリカのプリストル・マイヤーズスクイブがヤマサ醤油からのライセンスを受けて開発し、FDA に申請した成人服用量は 40mg 1 日 1 回で、アシクロビル内服の 100 分の 1 である。

(抗ヘルペス剤を飲んでおられる患者さんをご存知だと思いますが、ゾビラックスにしるベルクスロンにしるアシロベックにしる、錠剤が大きすぎます。老人にとっては大きすぎて喉に通すのに一苦労されます。それはソリブジンに比べて抗ヘルペス作用を発揮するには大量を飲まざるをえないためです。しかもアシクロビルの代謝産物が尿に出る時に腎血石を起こすことがあると能書きに書いてあるので、大量に水を飲まなければいけないのです。実際は起こったことはないのですが。)

特徴

ソリブジンはチミジンのアナログであり、非環状グアニンヌクレオシドのアシクロビルとは構造を異にする。(皆さんご存知ですね、全ての生命体の遺伝子の DNA は 4 つの塩基から成り立っていることを。チミン、グアニン、シトシン、アデニンの 4 つです。グアニンに五炭糖といわれる糖がついたものをグアニンヌクレオシドといいます。チミジンはチミンが五炭糖と結びついたものです。ちょっと難しいでしょうけど、ついてきてください。ヘルペスウイルスは DNA ウイルスでありますから、増殖するためにはチミンに五炭糖がついたチミジンとグアニンに五炭糖がついたグアニンヌクレオシドが必要ですが、外から薬としてそれらと似たもの、つまりアナログを入れてあげると、本物と間違っ取り込んでしまいます。すると本物ではないので、偽者を取りこんでしまうとそれ以上増殖することができなくなるのです。) ソリブジンがアシクロビルより水痘帯状ヘルペス (VZV) に強い活性を示すのは、第 1 に VZV のチミジンキナーゼに対する親和性が圧倒的に高いこと、即ち、著しくリン酸化され易いことにあり、(従って偽のアナログにリン酸が非常につきやすいので、ますますヘルペスウイルスの間違った DNA ができてしまうので、ヘルペスウイルスは増殖できなくなるのです) また、アシクロビルの活性化とは異なり、ソリブジン—リン酸は細胞のキナーゼでは次の段階のリン酸化はされず、ソリブジンの 2 段階目のリン酸化もウイルスのチミジンキナーゼにより行われることによる。単純ヘルペスウイルス 2 (HSV-2) のチミジンキナーゼはチミジル酸キナーゼ活性が微弱なためソリブジンの HSV-2 に対する作用は著しく弱い。(完全なヘルペスウイルスの DNA を作るためには、チミジンにリン酸がつき、グアニンヌクレオシドにもリン酸がつく必要があるのです。これらにリン酸のついたものをヌクレオチドといいます。ヌクレオチドにリン酸をつける酵素をキナーゼといいます。もっと知りたい人は高校の生物の教科書の DNA と核酸の項目をもう一回復習してください。)

薬理

ソリブジンはヘルペスウイルスのチミジンキナーゼで特異的にリン酸化されて 3 リン酸化体の活性体となり、恐らくチェーンターミネーターとして働き、ウイルスの DNA

鎖の中には取り込まれることなく、ウイルスの DNA ポリメラーゼを阻害し、或いは直接 DNA ポリメラーゼを阻害し、DNA の複製を阻害することでウイルスの増殖を阻害する。(薬理作用について述べているのですが、ヘルペスウイルスが増殖するためには、必ず先程述べたヌクレオチドが連続的に繋がって行く必要があります。そのためには DNA ポリメラーゼとって、DNA を繋いで重合させていく酵素が必要なのですが、その酵素の働きがないと DNA を増やすこと、つまり複製が不可能となり、ヘルペスウイルスが増殖できなくなるのです。)

副作用

副作用発現率は 3.5%で内訳は発熱、悪心・嘔気、嘔吐、食欲不振、上腹部痛、発疹となっている。しかし、このデータには後述する 5-FU 系代謝拮抗薬との相互作用による副作用は含まれていない。日本国内では治験段階で 3 人、1993 年 9 月の発売後 1 年間に 15 人の死者を出している。(抗がん剤である 5-FU と併用して使った時に、治験段階で 3 人死んだことを明確に新村先生が公表しなかったのではないかという疑問が国会で追求され問題にされたのです。抗がん剤を使っている人は必ず免疫が落ちていきますから、その間ヘルペスウイルスは膨大な量に増殖しています。ただ 30 年前はあくまでも、いわゆる目に見える帯状疱疹や単純ヘルペス口内炎や口唇炎や性器ヘルペスに限られて使われていたので、治験の患者数が少なかったのです。従って治験の患者を増やすためにがん患者にも手を出さざるをえなかったのでしょう。新村先生の勇み足だったのでしょう。もちろん現在もアシクロビルは目に見える上記の症状にしか健康保険は使えないのですが、30 年前は保険外治療というのは極めて厳格であったので、ますます治験の患者を見つけることが難しかったのでしょう。

しかしながら新村先生はこのようながん患者に使う治験の中で、ソリブジンが様々な神経症状にも確実に効果があることを知っていらっしやっただけです。それは阪大の先生でいらっしやっただけの山西弘一先生にもいえることです。彼らは大学の教授先生ですから、その頃もメニエールの患者や、Hunt 症候群や、ブドウ膜炎や、虹彩炎や毛様体炎や、脈絡膜炎や、強膜炎に対しても、先端医療として積極的に使って患者の病気を誰よりも先に治すことができる立場にいらっしやっただけですから、上記の疾患についてもソリブジンやアシクロビルを使うべきであったのです。実際におやりになられたペーパーもいくつもあるのですが、あくまでも皮膚科の教授の立場としておやりになられただけであり、他の領域、例えば内科や眼科や耳鼻科のテリトリーを荒らすことになるので、大声で真実を語るができなかったのでしょう。残念です。)

5-FU との併用

(5-FU という抗がん剤は癌化した細胞が増殖するために必要な DNA の核酸の合成を阻害するものです。核酸というのは上で述べたように、4 つの塩基であるアデニン、グアニン、シトシン、チミンに糖、リン酸が規則的に結合した高分子の有機化合物であります。ところが必ず DNA はメッセンジャー RNA (mRNA) に情報を転写する必要が

あります。この時に RNA はチミンの代わりにウラシルが必要になるのです。従って核酸を作るために必要な人体にある塩基はアデニン、グアニン、シトシン、チミン、ウラシルの5つになります。チミン、シトシン、ウラシルの3つでできた核酸をピリミジンといいます。5-FUはこのピリミジンを合成したり分解することができなくさせます。もっと詳しくいうと、5-FUは核酸を合成するために必要なチミジル酸シンターゼという酵素の働きを阻害するので、癌細胞のDNAが作れなくなり増殖できなくなり、抗がん剤として使われているのです。ところが正常な細胞も増殖ができなくなるので抗がん剤を使うことは、同時に正常な細胞も殺してしまうので、抗がん剤を使う意味がないという医者が出てくるのです。)

ソリブジンの一部は腸内細菌の作用でプロモビニルウラシルに代謝分解される。このプロモビニルウラシルはフルオロウラシル(5-FU)の代謝酵素であるDPD(dihydropyrimidine dehydrogenase)と結合して不可逆的に阻害し、5-FUの血中濃度を上げ、5-FUの副作用である白血球減少、血小板減少などの血液障害や重篤な消化管障害を引き起こす。後述する薬害事件の生じる原因である。構造式からは、相互作用の生じることは予測可能ではないが、開発途中で実施した5-FUとの併用毒性の動物実験の結果を十分考慮し、5-FU系薬剤を併用禁忌にし、使用する医師や薬剤師がこれを遵守すれば発売後の薬害事件を防ぐことができた。

(今日はここまでですが、ソリブジン事件の詳しいいきさつを下記に書き添えておきます。次回コメントするつもりです。) 2013/12/12

ソリブジン薬害事件

(私がこれほどまでにソリブジンにこだわるのはなぜか、さらに詳しく書きます。20万年前に私たちの直接の祖先であるホモサピエンスが、アフリカの現在のエチオピア付近で発祥して以来、人類は病気を引き起こす異物、とりわけ病原菌との戦いに明け暮れ、大敗北を喫したこともあるのですが、薬も使わずに人類は全て自分自身の免疫だけで乗り越えて、現在まで人間という遺伝子の命脈を保ってきたのです。例えば、老若男女を問わず、何億人といえるほどの最も多数の人類を殺したのは黒死病を引き起こしたペストであります。次に天然痘であり、結核でありました。ところが、抗生物質とワクチンが開発されてから、このような病気で死ぬ人は皆無となりました。ましてや、若くして死ぬ人は誰一人としていなくなったのです。

皆さんはこのような病気がなくなったのは、衛生状態が良くなり、ペスト菌も天然痘のウイルスも結核菌も少なくなり、たとえ残されていても滅多に人体に入ることがないためだということをご理解されているでしょう。さらに、仮にテロリストのアルカイダがペスト菌や天然痘のウイルスや結核菌を生物化学兵器として敵国にバラまいたところで、死ぬことはまずないのです。なぜかという、

これらの手強い病原菌に対しては、抗生物質とワクチンで対抗できるからです。つまり先進国では、過去に人類を脅かしおびただしい死を招いた病気の原因がなくなり、よしんばそのような病気の原因が人為的にバラまかれたとしても、何も怖くないのです。にもかかわらず、医薬業界は病気が病気と騒ぎ、いつ何時にでも病気で人が死ぬかのように喧伝していますが、一体どうしてなのでしょう？

新しい病気の原因を文明が作り出したことを認めようとしないからです。人体に入れられたくない異物を現代文明が生み出したのです。その異物が化学物質とヘルペスなのです。化学物質が生み出す病気はアレルギーであり、かつ膠原病なのです。医学者たちはアレルギーを「免疫による過敏反応」と簡単に一蹴してしまい、まるで38億年かかって出来上がった免疫が狂ったような言い方をしますが、原因がなくて病気の反応が起こる訳は絶対にはないことはお分かりでしょう。この世に原因のない病気などは何一つとしてないのです。免疫が勝手に病気を作るなどというアホなことはやるわけではないのです。自己免疫疾患や過敏反応などという言葉は文学上の言葉です。過敏とは一体なんなのでしょう？ 医者たちが作り上げた言葉のアヤであります。38億年かかってできた人類の免疫の遺伝子は、必要だからこそ反応しているだけです。自己免疫疾患とは何なのでしょう？ 自分の免疫が自分を生み出した人体を攻撃するというアホな働きをすることはなおさらあるわけではないのです。ただ医者たちは化学物質が自己免疫疾患やアレルギーなどの過敏反応の原因であると認めたくないために、免疫が勝手に病気を作り出していると言いくるめているだけなのです。この化学物質とIgEで戦うとアレルギーとなり、IgGで戦う時に膠原病になるだけなのです。

今年、抗体のクラススイッチの遺伝子を発見されて文化勲章を受けられた我が母校の京大の本庶祐先生は、クラススイッチの意味付けを今なおされておられないのは極めて残念なことです。同じ化学物質に対してIgGをIgEにBリンパ球が変えることを抗体のクラススイッチといいます。ところが、世界中の学会は、残念なことに化学物質をIgGで処理する病気は自己免疫疾患と言い、原因が分からないと言い張り続けています。しかもその論理が矛盾に満ちたことを知っていながらであります。残念です。

このいわゆる自己免疫疾患といわれる病気をアレルギーに変えてしまえば痛みが痒みに変わり、最後はレギュラトリーT細胞によって免疫寛容が起こり、この化学物質と共存できるのです。ちなみに、このレギュラトリーT細胞の発見にも、我が母校の京大の先生でいらっしゃった坂口志文先生（現在は大阪大学免疫学フロンティアセンターに主任研究者）が貢献されたようですが、今なお坂口先生はレギュラトリーT細胞の存在の意味付けはされてはおられません。両先生方は臨床を何一つされておられない基礎の研究者でおられるので、意味付けをする必要はないと考えておられるのでしょうか？ いずれにしろ、両先生方は38億年

かかって出来上がった免疫の遺伝子よりも、人間の頭の方がはるかに信用できると考えておられるようです。残念です。

私は全く違った考えを持っています。免疫の遺伝子こそ神なる存在と考えていますから、この38億年間、この地球上のあらゆる生命体の命を守ってくれた遺伝子を信じます。この神なる遺伝子が発したメッセージを理解し、そのメッセージを伝えることが私の仕事です。そのメッセージを無理矢理に意図的に曲解し、メッセージの実行を阻止しようとしているのが現代の医学の全てです。つまり免疫の遺伝子の働きを変える薬しか作れないがために、人為的遺伝子病という病気がどんどん増えていくのです。そして新たなる病名遊びが始まるのです。

この免疫を抑える薬を使うたびに病気の原因が増えていくのです。その最も多く増やされている病気の原因は何だと思いませんか？免疫を抑えるたびに増えていくヘルペスウイルスなのです。今現在世界中で一番多い病気を引き起こしているのは、化学物質によるアレルギーと膠原病に負けないほど病気を作り出しているのはヘルペスウイルスであります。様々な痛みや感覚神経の異常な症状はヘルペスと免疫の戦いの結果なのです。このクローン病の患者さんや潰瘍性大腸炎の腹痛の原因も、腸管神経叢に潜んでいるヘルペスを、患者さん自身と医者や薬が免疫を抑えたために増えてしまったためなのです。免疫が復活する時に増えたヘルペスと感覚神経で戦う時に痛みが見られるのです。にもかかわらず、潰瘍性大腸炎やクローン病の専門家は、自分たちの免疫を抑える薬が病気の原因を増やしていることに気づかないのです。

以上まとめて言うと、化学物質が原因であるあらゆる種類のアレルギーを膠原病に変えてしまうのも免疫を抑えるためであり、その間にヘルペスを増やして免疫が回復した時に再び患者が苦しむざるをえないのも、医者や薬が作った医原病なのです。このヘルペスウイルスの増殖を現在用いられているアシクロピルの2000倍も抑えてくれる優れたソリブジンが、たまたまガン患者に使われた5-FUという抗癌剤と併用されて医療事故を起こしたという理由だけで、なぜ販売中止になったのかの疑問が解けないので、あくまでもそのいきさつと原因を追及しようとしているのです。だって肺ガンに対して用いられる抗癌剤であるイレツさが間質性肺炎を起こして肺ガン患者を殺してしまっても無罪の判決が出たのに、なぜソリブジンがこの世から消え去ってしまったのか不思議でならないのです。これを解明しようとしてこのようにしつこくヘルペスについて追及しているのです。

リウマチ性多発筋痛症の筋痛も、線維筋痛症の痛みも、全てヘルペスと免疫の戦いであるのです。しかもヘルペスによって人間は殺されることはないのです。天然痘のウイルスによって人類史上、何千万人の人が亡くなったのですが、ヘル

ペスは人を殺すことはないのです。ただただヘルペスはあらゆる種類の神経にこっそり住んでいるだけなのです。免疫を無理矢理抑えない限りは増えすぎることのないヘルペスを増やしたのは、まさにストレスに耐えるために人間自身が作り出したステロイドホルモンであり、さらに医者が出すステロイドホルモンをはじめとする免疫抑制薬であるので、医者や製薬メーカーに責任を問うべきでありますが、私以外に誰もその責任について口に出さないのです。

ヘルペスの症状に対しては世界中の医学者たちは、まるで原因不明にヘルペス自身が活性化したために様々な症状が出るとうそぶいていますが、これも真っ赤な嘘です。増えるだけでは症状はでないのです。症状、つまり病気は敵と免疫の戦いによってしか生じないのです。医薬業界は嘘にまみれています。現代文明の残された病気の主な原因はたった2つ、化学物質とヘルペスだけしかないのにもかかわらず、22000種類もの病名をつけまくっています。ほとんどの治らない病気は原因不明だと言いまくっています。自分たちの免疫を抑える薬が病気を作っているにもかかわらずであります。残念です。

病気は命を守ってくれる免疫の力が正常であることを実証しているだけなのです。毎日、飲食物を通して摂取される化学物質とヘルペスとの戦いで死ぬことは絶対になく、必ず免疫が勝利するので、病気を怖がることは何一つないのです。来年から厚労省は難病指定を56から300にして、さらに無料で病気を治せないようにするようですが、遺伝子病以外は難病という名称をつけるべきではないのです。遺伝子病以外の難病は、病気を治してくれる神なる遺伝子を変える薬のために生じているだけです。免疫の遺伝子を変えることは絶対に許されないのです。

さらに、このソリブジンの開発の学問的指導をした方が東京慈恵医大の教授であった新村真人先生です。彼は1年間毎日抗ヘルペス剤を飲ませ続ければ、単純ヘルペスとの戦いで見られる全ての症状が消え去るという研究成果を残しています。その通りです。手強いヘルペスにしろ、抗ヘルペス剤を長期に大量に患者に飲ませ続ければ、あらゆる神経症状が消え去ってしまうのです。彼はこの真実を1990年代に見つけ出したために、意図的にソリブジン事件を起こされて、彼は徐々に徐々に医学会から抹殺されてしまったのではないかと考えています。残念です。

下に、原因の一部がヘルペスによるもの、またはほとんど全てがヘルペスによるものである病名の全てを網羅しておきます。耳慣れない病名もありますが、今後下記の病名をつけられた患者さんの手記がどんどん入ってきたときに、それぞれの病気について具体的に解説することになるでしょう。既に多くの手記があることもご存知でしょう。

頭痛、片頭痛、群発性頭痛、緊張性頭痛、風邪に際して見られる頭痛や肩こり、生理に際する頭痛、顔面神経麻痺、ベル麻痺、三叉神経痛、耳鳴り、難聴、突発性難聴、メニエール病、熱性痙攣、めまい、立ちくらみ、吐き気、原因不明の嘔吐、車酔い、船酔い、慢性疲労症候群、五十肩、四十肩、肩こり、首こり、倦怠感、疲れやすさ、口内炎、口唇炎、口角炎、しわがれ声、いつまでも続く喉の痛み、慢性的な喉の詰まり・違和感、寝汗、異常な汗かき、こむら返り、顎関節症、歯肉炎、歯周炎、筋肉の痙攣、目の結膜の痛み・違和感、目の奥の痛み、ブドウ膜炎、目の強膜炎、目の脈絡膜炎、虹彩炎、細菌感染によらない角結膜炎、視神経炎、リウマチの痛みの一部、リウマチ性多発筋痛症の筋肉の痛み、線維筋痛症の筋肉の痛み、漢方で梅核気といわれる喉の詰まる症状、いわゆる自律神経失調症、熱の出ないあらゆる種類の腹痛、クローン病や潰瘍性大腸炎の腹痛、原因不明の腹痛、坐骨神経痛、腰痛症、腱鞘炎、性器の痛み、ペニスの痛み、放射線治療後の痛み、抗癌剤を使用している時の様々な痛み、糖尿病性神経障害の痛み、変形性膝関節症の痛み、変形性股関節症の痛み、原因不明の股関節の痛み、痛風といわれる時の痛み、あらゆる神経の痺れ感、心因性多汗症、心因性排尿障害、発作性動悸、発作性頻脈、発作性高血圧症、発作性心房頻拍の一部、狭心症の一部、心因性疼痛、小脳性運動失調症、筋萎縮性側索硬化症（ALS）の一部、てんかんの一部、多発性硬化症やその他の中枢神経系脱髄性疾患、チック障害、**Hunt**症候群、レイノー病の一部、多くの逆流性食道炎、多くの慢性胃炎、原因不明の肝炎、原因不明の膵炎、前立腺炎、アトピーのピリピリ感やチクチク感や不愉快な痛み、椎間板ヘルニアの痛み、脊柱管狭窄症の痛み、脊椎すべり症の痛み、不眠症の一部、振戦、筋肉の筋膜性疼痛、過喚起（ハイパーベンチレーション症候群）の一部、しゃっくり、原因不明の発熱、原因不明の下痢…

などなどではありますが、結局のところ人体のあらゆる神経に潜む力があるヘルペスウイルスと免疫が戦うときに見られる症状に対して、病名をつけているだけなのです。言い換えると、人間は神経の働きで活動しているといえますが、全身の隅々に分布しているどの神経ヘルペスと戦うかによって上記の病名がつけられているだけなのです。つまり上記の全ての病気は神経にいるヘルペスと免疫の戦いに見られる病気にすぎないのです。

ここで神経の成り立ちを概観してみましょう。神経系は大きく分けて3つに分けられます。まず運動を支配する運動神経系と、2番目は痛みを含めた知覚を支配する感覚神経系と、最後は皆さんご存知の自律神経系であります。これらの3つの神経系の全ての神経にヘルペスウイルスは住むことができるのです。なぜならば、これら3つの神経系は全て同じ細胞であるニューロンといわれる神経細胞からできているからです。これらの3つの神経系のどこかでヘルペスと戦うと、様々な症状がヘルペスと免疫の戦いによって引き起こされた神経炎として出現するのです。

例えば運動神経系で戦うと、筋肉が動かしにくいとか、こむら返りが起こります。感覚神経系で戦うと、痺れたり痛いと感じます。それでは自律神経系で戦うとどんな症状が出ると思いますか？皆さんご存知のように、自律神経には交感神経と副交感神経があります。ヘルペスと交感神経で戦う時の症状と、副交感神経で戦う時の症状がまた異なるのです。交感神経は人体を活動させる神経であり、一方、副交感神経は人体の活動を静止しようとする働きがあります。全ての臓器にはこの交感神経と副交感神経が分布しており、お互いに拮抗作用を及ぼし合っていて、毎日の、いや死ぬまでの生命の働きをコントロールしていることはご存知でしょう。上記の様々な病気が、どの運動神経系で戦っているのか、どの感覚神経系で戦っているのか、どの交感神経・副交感神経で戦っているのかをいずれ詳しく書くことをお約束します。

古来から、病気を認識する症状は痛みであります。痛みというのは体の隅々まで張り巡らされた神経細胞末端の感覚器である神経終末によって知覚されます。この神経終末は皮膚では1㎠四方に約100個近くもあるといわれています。人体の痛みの最大の情報受容体は、この神経終末が感じ取っているのです。ここで知覚された痛みの感覚が脳に伝えられ、人体で何らかの敵との戦いが行われていることを知らせる人体の防御反応といえます。体の異常を知らせるサインであり、何らか治療の必要性があるのですが、現代医学はその敵が何であるかを突き止めようとするどころか、痛みの原因となっているヘルペスを増やすことしかしていないのです。ただただ38億年かかって身につけた痛みの感覚を、痛み止めや解熱剤で麻痺させることに専念するだけなのです。この痛みの原因はヘルペスであるということを私が世界で初めて明らかにしたのです。皆さん、肩こりが頸部の脊髄神経で免疫とヘルペスで戦っているということを誰が明らかにしたでしょうか？明らかにしたのは私なのです。この発見だけでもノーベル医学賞はもらえないでしょうか？ワッハッハ！

あらゆる病気の原因を明らかにしないで病名をつけまくって楽しんでいるのが現代の医学会なのであります。上記の様々なヘルペスとの戦いである症状を、適当に名前を付けて難病であると言い張っているだけなのです。ほとんど全てがヘルペスと戦いによる痛みや運動神経の異常や自律神経の異常のサインであるわけですから、抗ヘルペス剤を大量に長期に投与すれば、ヘルペスが神経で増えることが終わり、免疫がそのうちにヘルペスを倒してくれるのです。ヘルペスを殺そうとしている免疫の働きが症状として出るにもかかわらず、世界中の医学者たちは一言も口にしないのです。残念でたまりません。

ここでついでに、痛みはどこから発生するかによって3つに分けられます。内臓痛、体性痛、血管痛の3つであります。まず1つめの内臓痛は、胃や小腸や大

腸の異常により発生するもので、腸管の平滑筋が収縮しすぎたり、逆に腸内ガスによって伸展する場合に締めつけられるような痛みとして感じるのです。例えば腸閉塞などの場合は、腸内ガスが閉塞部位以下に移動できずに、閉塞よりも上の部位の腸管の平滑筋が伸展しすぎたために痛みとして感じるのです。これはいわゆる普通の痛みというよりも、平滑筋が締めつけられ、平滑筋が緊張しすぎているのを脳で感じているのです。

2番目の体性痛といわれるのは、体の内側ではなくて、体の表面側の異常を感じているのです。例えば筋肉や腰や肘や膝などの痛みや、喉の痛みや歯の痛みがあります。痛みの感じ方はズキズキ・ジリジリという疼痛が特徴で、持続的な痛みであります。

3番目の血管痛というのは、血管の収縮や拡張、または血管が詰まったために感ずる痛みです。例えば片頭痛や慢性頭痛といわれるのは、血管が拡張する時の痛みであります。狭心症や心筋梗塞の痛みは心臓を栄養している冠状動脈が急激に収縮や拡張するために痛みを感ずるのです。この痛みも平滑筋の過緊張に寄るものと考えてもよいわけですから、内臓痛のひとつといえます。

この3つの痛みの分類はそれぞれ支配する神経が異なるので、治療法も異なるのです。例えば、1番目の内臓痛は腸管の平滑筋の働きが強すぎるので、その働きを抑えるために抗コリン薬という薬が用いられます。2番目の体性痛に対しては、皆さんご存知のようにアスピリンやロキソニンなどの、いわゆる痛み止めが用いられるのです。ところが3つ目の血管痛に対しては、血管を広げる薬であるニトロ化合物などが用いられます。

さらに痛みが上に挙げたどの3つの範疇にも入らないことがあります。神経伝達物質の異常とか、癌性の全身性の疼痛の場合です。またそれについては書く機会があれば詳しく書きましょう。特に抗コリン薬は神経伝達物質のひとつであるアセチルコリンの働きを抑えるものであります。いずれ詳しく書きます。皆さん、ヘルペスがどんな神経で戦っているかが少しずつお分かりになってきたでしょう。

今日はここまでです。2013/12/19

1979年(昭和54年)、ヤマサ醤油が「ソリブジン」を新規に合成し、上述の如きヘルペスウイルス、特にHSV-1とVZVに対する選択性の高い強力な抗ウイルス作用を確認した。(ヤマサ醤油は千葉の銚子にある有名な醤油造りの老舗会社であったのですが、発酵技術を応用して遺伝子の核酸を製造する技術を用いてソリブジンの開発に成功したのです。さらにヤマサの技術はかの有名なC型

肝炎ウイルスの治療薬であるリバビリンも作り出したのです。このリバビリンとインターフェロンの併用療法で、C型肝炎患者のHCVウイルスが排除され、完全に慢性肝炎が治った人もいます。素晴らしい会社です。)

1985年(昭和60年)から日本商事と経口帯状疱疹薬として共同開発を進めた。

1988年ヤマサ醤油は米国のスクイブ社(後に合併によりプリストールマイヤーズスクイブ)に海外の開発及び販売権をライセンスした。

1993年(平成5年)9月3日、抗ウイルス剤の商品名「ユースビル」を日本商事から発売。

しかし、発売後1ヶ月足らずでフルオロウラシル系抗癌剤との併用で重篤な副作用が発生する(9月20日にエーザイ側から市販後最初の1例目の副作用情報が日本商事に寄せられたと報告されている)。

(治験の段階で、ソリブジンと5-FUを同時に使うことによって重篤な副作用が出ることは知られていました。薬は人体にとっては全て異物でありますから、何らかの想定されない副作用が出るのは当然であります。はじめから5-FUとの併用の副作用は知られていたのに、5-FUを用いていない水痘帯状疱疹ウイルスや単純ヘルペスの患者さんだけに使うべきであったのに、なぜわざわざ5-FUを用いているガン患者に積極的に使い始めたのかも謎です。

後天的遺伝子病であるガンを治す薬は永遠にあるはずはないので、いずれガン患者は遅かれ早かれガンで死なざるをえなくなるにもかかわらず、わざわざソリブジンを用いて死を早めさせたのかも疑問であります。まるでガン患者をソリブジンで殺してしまうというよりも、ソリブジン自身をこの世から抹殺するために、5-FU使用患者にわざわざソリブジンを使ったかのようです。こんな優れた抗ヘルペス薬を、なぜこんなバカな使い方をしたのかを理解することは無理です。何かはじめから特別な意図があったと考えざるをえません。ソリブジンでヘルペスを減らしてしまうことは、医薬業界の自殺をもたらすことを知っていた誰かの意図を感じてしまいます。ヘルペスを増やし続けなければ医薬業界が持たないという意図をです。ワッハッハ！)

1994年9月に厚生省(現・厚生労働省)から公表された「ソリブジンによる副作用に関する調査結果」によれば、1993年10月8日に中央薬事審議会の副作用報告調査会が開催され、その諮問を受け厚生省は「緊急安全性情報(ドクターレター)」の医療機関への配布を指示した。10月12日、厚生省はソリブジンと5-FU系薬剤との相互作用による死亡3例を含む7例の重篤な副作用発現を記者発表した。同日、日本商事も大阪証券記者クラブにて「重篤な副作用の発現」と「製品の出荷停止の措置」を発表した。

12日に「自主的安全性情報」、13日に「緊急安全性情報」を医療機関に配布

し、11月19日より自主回収を実施。日本商事の調査の結果、23例で副作用発現（うち死亡14例）となった。

1994年（平成6年）3月5日、「ソリブジン」による同社株のインサイダー取引疑惑が持ち上がる。「ソリブジン」の相互作用による副作用で死亡事故が発生したことが公表されるまでに、日本商事の役職員・社員と、ユースビルに関わったエーザイ社員、さらには取引先の医師やその家族がそれぞれ自己保有している日本商事やエーザイの株式を売却し株価下落の損失を回避したことが証券取引法違反（インサイダー取引禁止）に問われた。この為、日本商事社長の服部孝一が辞任する。（このソリブジン薬害事件は、薬害がクローズアップされた以上に、もうひとつの重大事件が生じたのです。素晴らしいソリブジンの効果を十二分に知っていた日本商事の役職員・社員と、ユースビルに関わったエーザイ社員、さらには取引先の医師やその家族がそれぞれ大量に日本商事やエーザイの株式を大化けすると買い占めたのです。アシクロビルよりも2000倍も抗ヘルペス作用があるソリブジンを作って売り始めた会社の株を買うのは当然です。それがソリブジン薬害事件のために、一夜にして価値のないものになる可能性をいち早くこっそり知った人たちが、損を回避するためにインサイダー取引をやってしまったのです。ソリブジンにとってはダブルパンチです。にもかかわらず、ソリブジン自身のヘルペスに対する効果は抜群ですから、ソリブジン自身を葬り去る必要はなかったのです。ソリブジンを作った会社の株のインサイダー取引とソリブジン自身の薬としての効能とは全く関係がなかったにもかかわらず、ソリブジンは闇の中に葬り去られてしまいました。残念です、残念です、本当に残念です！世界中の人たちの全てが苦しめられることを知れば知るほど、ソリブジンが復活することを願わざるをえません。）

日本商事はユースビル錠の復活を期して、アメリカにおけるソリブジン開発の進捗を注視していた。しかし、1996年7月、ソリブジンのNDA（新薬申請の略称）が審査の途中で取り下げられたため、アメリカでの開発は中止となり、これを受けて日本商事はユースビル錠の再上市を断念した。（このソリブジンがアメリカのNDAの審査の途中で取り下げられた理由もはっきりしません。アメリカでもヘルペスウイルスが、30年前も今もこれから先も病気の一つ大きな原因ですので、患者にとってはこれほど大きな恵みを与えてくれる薬はないのにもかかわらず、なぜ取り下げざるをえなかったのでしょうか？おそらくこの一般名がソリブジン、商品名がユースビルと呼ばれた抗ヘルペス剤が世界中に売りまくられたら、現代文明の病気の全てがなくなる可能性があるので、世界の医薬業界がソリブジンの販売を阻止した可能性があると考えざるをえません。この世から病気をなくすために、ソリブジンが再び日の目を見ることを願ってやみません。）

なお、「ユースビル」は薬害と言われながらも日本商事の自主回収であり、当時の厚生省から承認取り消しはされなかった。つまり、厚生省は併用禁忌の徹底

や安全性情報の提供など方策を練れば再発売が可能な道筋をつけていたのである。しかし、日本商事側が自主的に承認を取り下げたことにより、ソリブジンは市場から姿を消し、長きに亘って日本での帯状疱疹治療薬はアシクロビル系統のみとなっている。

(ユースビル、つまりソリブジンは、日本商事がなぜ自主的に承認を取り下げたのかも疑問が残ります。しかも当時の厚生省は、併用禁忌の徹底や安全性情報の提供など方策を練れば再発売が可能な道筋をつけていたのにもかかわらずであります。このソリブジン薬害事件は、世界の医薬品の歴史の中で人類にとって最大の打撃を与えた謎であります。免疫をヘルプできる製薬メーカーが作れる薬は3つしかないのです。ひとつはワクチンであり（もっとも不必要なワクチンが多すぎますが）、2つめが抗生物質であり、3つめが抗ヘルペス剤だけではありません。

人を殺すような病気の原因がなくなった文明社会において、最後に残された病らしい病気の原因は、死ぬまで神経に隠れ続け、免疫が落ちている間に増え続け、免疫が回復した時に不愉快な症状が出現するヘルペスだけであります。しかも世界中の70億人の全ての人間の神経に入り込み続け、人間の免疫や抗ウイルス剤では絶対に殺しきることができないのがヘルペスウイルスであります。このヘルペスウイルスの増殖を完全に抑え込むことができたと考えられるソリブジンが闇に葬られてしまったことは、人類全体にとっての悲劇であります。今まで述べてきた私のホームページを理解していただければ、私がいつまでもヘルペスにこだわる理由や、最高の抗ヘルペス剤であったソリブジンにこだわる理由を理解していただけるでしょう。何千回も言わせてもらいます。文明の病気の原因は化学物質とヘルペスだけです。人間の免疫は化学物質とは自然後天的免疫寛容によって共存できるのですが、ヘルペスだけは共存不可能です。ヘルペスはあらゆる病原体の中で天才的な病原体でありウイルスであります。ひょっとすればAIDSを引き起こすHIVウイルスよりもずる賢く狡猾であるかもしれません。

ちなみにつまらない話をひとつつけ加えておきましょう。今日の新聞に、「厚生省が水痘ヘルペスに対するワクチンの接種をすすめる」という記事が掲載されていました。こんな馬鹿げた話が堂々と一流大新聞に載っているのです。既に世界中の全ての人が水疱瘡、つまり水痘帯状ヘルペスにかかり、抗体もできているにもかかわらず、なぜ今さら水痘帯状ヘルペスに対するワクチンをする必要があるのでしょうか？馬鹿げています。これが最も進んだ現代医学の水準であります。悲しいやら、おかしいやらで、私の頭は狂いそうです。もちろんこのようなワクチンを推奨する医学者の頭は既に狂っているのですが。彼らにもう一度免疫学のイロハから勉強してもらいたいものです！アッハッハ！)

II、痔瘻

ある日突然、鼠径部に硬いしこりが触れて、座る時に激痛が走りました。典型的な「肛門周囲膿瘍」の症状で、すぐさまに最寄りのクリニックで切開排膿の処置を受けました。

（肛門周囲膿瘍は痔瘻のことです。後で説明しますが、痔瘻は正しくは直腸皮膚瘻というべきものです。それではどのようにして腸管に穴が開くのかを説明しましょう。まず腸粘膜での化学物質とIgGの戦いのために、腸管の粘膜がただれ、さらに深くただれると潰瘍になり、その潰瘍が腸管の壁を破ると瘻孔ができます。腸の粘膜の構造は場所によって変わることがありますが、一般には5層から成り立っています。腸管腔に直接面している粘膜上皮、次に粘膜固有層、次に粘膜筋板、次に粘膜筋層、最後に筋層がきます。それらを漿膜が囲んでいます。この5層を炎症が突き破ると瘻孔ができます。一番よく見られる瘻孔が痔瘻といわれるものです。痔瘻は一般に肛門といわれる肛門管に穴が開くわけではありません。肛門管の直前の直腸という腸管の最後部の粘膜の壁から肛門の皮膚にまで穴が開き、そこから炎症の結果、皮膚から膿やリンパ液が外部に流れだしていきます。だからこそ直腸皮膚瘻というべきなのです。

なぜクローン病に痔瘻がよくみられるのでしょうか？それを説明するために、まず肛門の構造から説明しましょう。解剖学の授業をしているわけではないので、分かりやすくはしょって書きます。肛門は英語で“Anus”といいます。これは「リング」という意味があります。リングとは輪の意味であり、肛門（肛門管）の周りには、内側に内括約筋という筋が輪になって走っており、さらに外側には外括約筋という筋が輪になって取り巻いているので、リング、つまりAnusというのです。内肛門括約筋は自律神経によって支配されている平滑筋であるので、不随意筋であります。つまり締めたり緩めたりはできないのです。ところが、その外側にある外肛門括約筋は横紋筋であり、平滑筋とは違い意志に従って自由に動かせる随意筋であります。従って“きばる”と、この随意筋である外肛門括約筋が収縮し、うんちが出るわけです。

大腸の終わりは直腸であり、直腸の後に肛門がくるのです。直腸と肛門の間は肛門直腸線といって明確に区別することができるのです。それは大腸の粘膜上皮は単層の（一層の）円柱の形をした細胞から成り立っており、一方、肛門は皮膚と同じ重層の（多数の層の）平らな扁平上皮細胞から成り立っているのです。違いは歴然としています。つまり肛門は皮膚と同じ種類の細胞からできているのです。クローン病に見られる痔瘻は、肛門から皮膚に穴が開くのではなくて、直腸から皮膚へと穴があく皮膚瘻であります。従ってクローン病でよく使われる「痔瘻」という病名は正しくはないのです。正しくは「直腸皮膚瘻」というべきです。クローン病についての権威だけは腐るほどあるが真実の学才が少ない大学

の教授が、痔核に似ているので痔瘻という名前を最初に安易につけたので、現在でも直腸皮膚瘻を痔瘻と言いつけているのです。学者先生は病名をつけるのが大好きですから、病名遊びから生まれた不正確な病名なのです。このような皮肉を言うのは、やはり学者は病気の原因を徹底的に追究すべきであって、病名をつけるだけで満足してはならないということを言いたいためです。

従ってこのような皮膚瘻は、小腸や大腸が皮膚に接触している部位ではいくらかでも見られるのです。直腸と皮膚が“いけいけ”になっているのを「直腸皮膚瘻」というのですが、実は女性の場合は、直腸と膣に瘻孔ができる「直腸膣瘻」がいくらかでも見られます。さらに女性に多いのですが、悲しいことに間違った免疫を抑えるペンタサやレミケードで治療をされてしまうと、直腸と膀胱とが通じてしまう「直腸膀胱瘻」も生じることもしばしばあるのです。残念ですが。

今述べたように、直腸は一層の丸い柱のかっこうをした上皮細胞からできているので、そこで化学物質と免疫がIgGで戦うと、すぐにその細胞はつぶされて下の層にある粘膜下層から、さらに筋層となる内肛門括約筋にまで炎症が波及し、最後には外肛門括約筋まで穴が開いてしまい、最後は皮膚にまで炎症が到達し、そこに皮膚瘻（皮膚の穴）ができてしまうのです。ところがこの直腸皮膚瘻からは膿がたっぷり出続けます。ただ単に穴が開くだけでは、その穴を通して膿が出ることはないのです。なぜ膿が出るかを説明しましょう。

人の糞便には天文学的な数の細菌が含まれており、糞便の約半分が細菌であることをご存知でしょう。人の糞便の1g中には数百種類以上の細菌がおり、10の10乗～12乗個の細菌が含まれています。つまり1g中には、10億個～1000億個の弱毒常在細菌が含まれているのです。糞便に弱毒常在菌が見られるということは、腸管の中に弱毒常在菌がいるということです。ご存知のように、腸管には200種類の細菌が100兆個も常に住んでいるのです。成人では弱毒菌であるバクテロイデス属や、クロストリジウム属に属する嫌気性菌が一番多いのです。さらに大腸菌などがあります。これらの細菌は通常は無害菌であります。宿主の免疫抵抗力が弱まると、感染の原因菌になったり、いわゆる日和見感染症を起こしてしまうといわれていますが、なぜ日和見感染症が起こるのか誰も解明していません。そこで私が解明してあげましょう。

まず日和見感染とは、免疫の正常な元気な人には病原性を示さないのですが、免疫機能が低下したために生じるクローン病や潰瘍性大腸炎の腸管でどんどん増えて、重篤な感染症を引き起こすことをいいます。ここでさらに病原性とは何かについて説明する必要があります。病原性というのは、人体の免疫が敵だと認識して自分の免疫で殺そうとする度合いが強いという意味です。日和見感染を起こす病原体には緑膿菌、クレブシエラ、プロテウス、セラチア、レジオネラ、大

腸菌、ブドウ球菌、腸球菌などの細菌や、カンジダ、アスペルギルスなどの真菌や、さらに単純ヘルペスウイルス、エンテロウイルス、アデノウイルスなどのウイルスであります。どうして日和見感染というのでしょうか？この言葉は実は正確な医学用語ではありません。文学の言葉です。正確には弱い敵でも免疫が弱くなった時に増えすぎると、免疫を取り戻した時にそれを殺そうとする免疫が働きだして、その敵を殺そうとした時に見られる戦いを日和見感染というのです。従って日和見感染という言葉は、正しくは「免疫低下弱毒菌増多症」とでも名付けるべきであります。

皆さん、ここで疑問を感じませんか？なぜ免疫力が弱まると弱毒菌に弱くなるのに、強い病原体に対してもっと弱くなってひどい感染症を起こさないのか？という疑問です。その答えを世界で初めて出してあげましょう。まず感染症とは何かを説明する必要があります。いつも言っているように、病気は免疫が敵と戦わない限りは絶対に病気という症状は生じないのです。感染症の場合、敵は何でしょうか？言うまでもなく、細菌であり、ウイルスであり、真菌などの病原体であります。つまり体内に入った病原体と免疫が戦わない限りは、絶対に病気の症状は起こらないことを確認してください。これを理解しない限り、以下の説明を理解するのは困難になります。というよりも、病気の本質を見逃すことになります。

それではまず人類が恐れてきた感染症を引き起こす原因は何だったのでしょうか？昔から感染症で人類が殺されてきたのは、ペスト、天然痘、マラリア、赤痢、ジフテリア、結核、破傷風、百日咳などがありました。これらはまさに強毒病原体というべきものであります。皆さん、現在の文明社会において、このような感染症を見ることが出来ますか？滅多に見ることはなくなりましたといえます。なぜでしょう？まずこれらの感染症が起こるためには、これらの細菌が出現する不衛生な環境が必要です。どこにペスト菌や天然痘のウイルスや結核菌がいますか？ほとんど見つけ出すことは困難です。さらによしんばこれらの強い菌と出会っても、これらの病原体に対してはワクチンが作られ、かつ抗生物質が作られてしまっています。そのうえに栄養状態が昔と比べて極めて良好であるので、すぐに自分の免疫で敵を殺す準備が常にできていますので、これらの病原体による感染症などは日本のような進んだ現代文明では起こりえないのです。

それでは日和見感染症はどこで、またなぜ起こるのでしょうか？皆さん、皮肉にも様々な病気を治すために病院に入院している間に感染症が起こっていることをご存知ですね？このような感染症を院内感染と呼ぶのです。通常は病原性を示さない弱毒菌である常在微生物が、病院の中ではうようよしています。病院に入院するという事は、抗生物質と抗ヘルペス剤の投与以外は対症療法であり、免疫を落として症状をとるだけですから、入院すればするほど長くなればなるほど、免疫力は低下させられるのですが、見かけの症状は良くなって病気が治った

と思込まされているだけです。従って万が一退院できたとしても、実は退院の時に一番免疫が落ちた状態であるのを誰も気づいていません。もっと具体的に言えば、必ず抗ガン剤やステロイドや痛み止めや解熱剤を大量に投与されて、免疫を落とす治療をされているので、免疫力を低下させられた患者の体内に既に潜んでいる弱毒菌の腸内細菌がどんどん増えているのです。このときに訳の分からない熱が出たりして、院内感染の例としては、緑膿菌をはじめとするグラム陰性菌や、ニューモンシステス・カリニ（現在はニューモンシステス・イロペチというようになりました。）や、サイトメガロウイルスやEBウイルスなどのヘルペスウイルスが単独、または重複感染することがいくらかでも起こっているのです。

さあ、イントロダクションはここまでにして、本論に戻しましょう。なぜクローン病の人に、上に述べたような直腸の粘膜と臀部の皮膚瘻がよく見られるのかに対する答えを出しましょう。クローン病も潰瘍性大腸炎も、原因は化学物質を排除しようとしてIgEで戦う世界を、免疫を落としたために化学物質を殺そうとしてIgGで戦う殺しの世界であるということは何回も述べました。まさに自分で長期にわたってステロイドホルモンを出しすぎたり、医者からステロイドをはじめとする様々な免疫抑制剤を飲まされすぎたために生じたのです。この間、腸管にいる弱毒性の常在菌がどんどん増えていくことを誰も指摘しないのです。

クローン病や潰瘍性大腸炎の最初の症状は下痢であります。なぜ下痢が出るのでしょうか？昔から下痢を起こすのは、強い病原体であるコレラ菌やある種の大腸菌や赤痢菌やサルモネラ菌を、下痢を起こして外部に排除するために生ずるのです。特にコレラ菌とある種の大腸菌は、強力な細菌毒素を出すので、その毒素を排除するために下痢が起こるのです。一方、赤痢菌やサルモネラ菌はこれらの細菌が腸管の細胞内に侵入し、これらの細胞内に侵入した細菌を免疫が殺すために炎症を起こし、腸管の粘膜が傷害され下痢が起こるのです。

それではクローン病の場合は何を下痢で排除しようとしているのでしょうか？2つあるのです。ひとつは化学物質であります。この化学物質はIgGで戦うと炎症を起こし、下痢になり、さらに粘膜免疫によってIgGからクラススイッチしてIgEで排除しようとした時にもアレルギー性下痢ともなっているのです。なぜならば腸管の粘膜細胞は常にクラススイッチと免疫寛容を起こすことができるインターロイキン10やTGF-βを作り続けているからです。[どうしてクローン病や潰瘍性大腸炎がクラススイッチをしやすく、かつ免疫寛容を起こしやすいかについては、コラムを読んでください。](#)ところが必ず化学物質とのIgEとの戦いによって炎症が起こり、腸管の粘膜に傷がつきます。このときに免疫を抑えた時に増やし続けた腸内の弱毒常在菌が粘膜の細胞から体内に入ろうとした時に、新たな腸内弱毒菌である常在菌と戦う時に赤痢菌やサルモネラ菌場合と同じように下痢を起こすのです。つまり正常な腸管であれば、腸内常在菌は腸の粘膜を

傷つける力はないのですが、化学物質によってIgGの戦いをやると腸に傷がつき、さらに潰瘍を起こすので、その傷や潰瘍から奥深くの体内に入り込もうとするのです。そこで再び化学物質以外に常在菌との戦いを免疫はせざるをえなくなるのです。

皆さん、ご存知ですね？腸内常在菌にはいわゆる善玉菌といわれる乳酸菌やビフィズス菌や酪酸菌がいます。彼らは病原性がない、つまり免疫に敵として認識されることがないので。一方、悪玉菌といわれるウェルシュ菌や大腸菌は悪さをすることがあるので免疫に敵と見なされて、免疫との戦いが始まるのです。それではついでに述べていきましょう。どうして悪玉菌と善玉菌という区別をつけるのでしょうか？それは、善玉菌はいくら増えても免疫には敵とは認識されないのですが、悪玉菌は多くなれば敵を認識する免疫の樹状細胞に取り込まれて、悪玉菌の断片をT細胞やB細胞に見せます。すると何百億というT細胞やB細胞の中に、それを異物と認識できる細胞が現れてくるからです。一度認識されてしまうと、免疫は否が応でも悪玉菌を排除しようとする戦いを始めてしまうからです。このために炎症が生じ、感染症という病気を起こしてしまうのです。

例えばクローン病や潰瘍性大腸炎で腹部膨満感は、ガスが腸管に溜まっている状態です。このガスを出すのはウェルシュ菌、正確には“クロストリジウム・パーフリンジェンス”という細菌が免疫に殺される時にガスを発生してしまうのです。このような時は、おなかが張るうえによくガスが出て、しかもそのガスが極めて臭いのです。このときにウェルシュ菌を殺すフラジールという抗生物質を用いると、特異的にウェルシュ菌を殺してくれるので症状が良くなるのです。実はフラジールを飲ませるとガスが減るだけではなく下痢も減り、しかも直腸皮膚瘻の治りも早くなっていくのです。これはどういう意味を持つのでしょうか？つまり直腸皮膚瘻からもれ出てくる膿は、白血球がウェルシュ菌や大腸菌を殺そうとして生じるのです。従って長期にわたってフラジールを服用させることがクローン病には絶対に必要なのですが、健康保険の中では連続的に長期に服用することは許可されないのです。残念です。

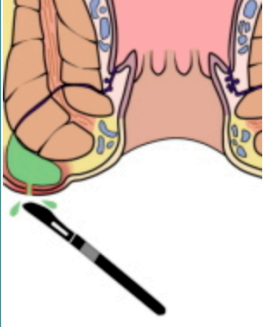
以上の話をまとめてみましょう。まずクローン病の患者さんはストレスのために自分で自分の免疫を落として、アレルギーになるべきものを逆クラススイッチしてクローン病にさせ、腸管の粘膜で化学物質と戦うので腸管に糜爛や潰瘍の傷を作ります。患者自身が免疫を落としている間に、代表的な悪玉菌であるウェルシュ菌などを増やし続けます。下痢が出始め異常に感じて病院に行き、クローン病と診断されると、「原因が全く分からない、従って治らない」というとんでもない間違った説明を医師にされて、下痢などの症状をとるために、免疫を落とすペンタサやアサコールやレミケードやヒミユラを使われだします。するとますます免疫力が落ち、ウェルシュ菌をはじめとする悪玉菌が腸管にますます増え続け、

腸の最後部である直腸に悪玉菌がいっぱいの糞便として溜まっていきます。もちろん下痢で排除される悪玉菌もあるでしょうが、化学物質が大量に含まれている糞便に対して直腸末端でもクローン病の戦いは行われ傷つきます。この傷ついた直腸末端から様々な悪玉菌が入り込み、そこで白血球をはじめとする様々な免疫細胞に食われ、好中球の死骸とともに直腸皮膚瘻から膿として出て行くのです。）

今日はここまでです 2013/12/26

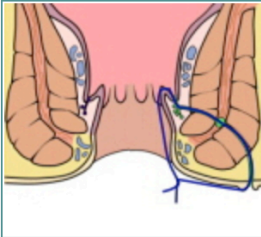
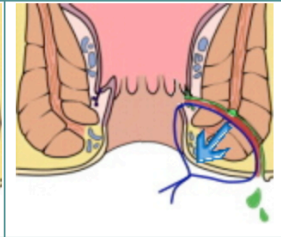
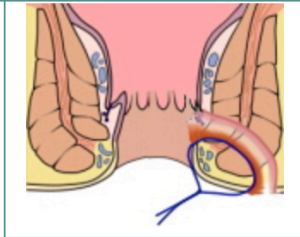
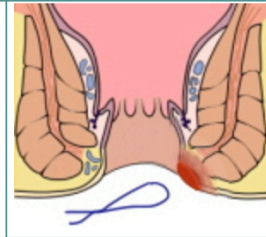
その時の激痛といったら、想像を絶する痛みでした。今までの人生の中で一番の痛みでした。その後、痛みは軽快しましたが、悲しい事に痔瘻に罹患してしまったのです。何故ならば、肛門周囲膿瘍は痔瘻の前段階なので、切開排膿される事より、二次口が出来トンネルが形成されてしまったからです。症状は痛みもなく（場所によっては痛みを伴う）、便通異常と切開した箇所から膿が出続けました。近所の病院で診てもらうと、痔瘻と診断されました。痔瘻のタイプはIILC型でIIはII型の筋間痔瘻というもので、内肛門括約筋の間にトンネルが形成される様で、Lは低位（LowのL）（高位だとH）（HighのH）Cは複雑なもの（ComplexのC）（単純なものはS）（SimpleのS）で複雑な低位筋間痔瘻という事になります。II型の痔瘻は痔瘻患者の約8割を占めるそうです。（I型というのは、皮下粘膜下痔瘻といわれるものであり、筋肉には瘻孔ができていないものであります。一方II型は筋間痔瘻といわれるものであり、瘻孔が筋肉を突き通って見られるものです。）身内のセカンドオピニオンで、大阪市内で肛門疾患患者に功を奏する、大阪北通病院の門を叩く事にしました。さすが「良医の門に病人多し」とあってか、診察まで4時間以上待った記憶があります。主治医は日本大腸肛門病学会の権威で、早速手術の日程が決まりました。術式は、シートン法と呼ばれるもので、原発口から二次口までをゴムなどで結紮する術式で再発率が低く、クローン病の痔瘻もこの術式が選択されるようです。そして手術は無事に終わり、4日間の入院と半年間に亘る通院治療で根治しました。（彼は半年後にクローン病と診断されたのでありますが、実はこの痔瘻の時に完璧なクローン病になっていたのです。それを肛門科の先生が気づかなかったのは不思議です。外科の先生は手術さえ上手になれば高い評価がえられるのですが、彼らはなぜこのような痔瘻になったのかの原因について考えないところが現代の専門医制度の弱点のひとつです。患者さんはこの痔瘻とクローン病の関係を知らされていなかったのです。実は痔瘻の手術をやる時に、同時に大腸や小腸の内視鏡の検査もやるべきだったのです。しかし肛門科の先生だったので、できなかつたかもしれません。）

（下にクローン病のために瘻孔ができ、その瘻孔に溜まった膿の排除のやり方と、シートン法の手技について掲載し、コメントもしておきます。）

切開排膿	
治療	 <p>膿のたまりの周辺に局所麻酔を注射で打ち、膿瘍部の皮膚を切開して膿を出します 膿が出て、肛門内部～臀部（おしり）に膿の通り道となり、痔瘻と診断される状態になります。 以後の治療は痔瘻の治療に準じます。</p>

【シートン法】

（瘻孔は瘻管ともいいます。内側の腸管の穴の入り口を原発口といい、外側の肛門の皮膚の出口を二次口といいます。ゴムをこの原発口と二次口からできた瘻管に通し、下の絵のようにゴムをきつく縛ります。ゴムは人体にとっては異物ですから、人体の免疫はこの異物を体外へ徐々に内側から外側へと取り除こうとします。粘膜ですから、徐々に徐々に外へ外へと排出されて行き、最後はゴムも粘膜の外へと押しやられ、最後は皮膚まで出てしまい、下の絵のようにゴムも脱落してしまうのです。このように異物であるゴムを内部の瘻孔に巻き付けても、人間の免疫はなんとかしてこの異物であるゴムを排除しようとする働きを十分に発揮してくれるのです。これがまさに免疫の極地というべきです。この免疫の働きを製薬メーカーが作った薬が抑え込んでしまうことが、いかに健康な体を戻すことができないかが、シートン法に用いられるゴムの処理でも理解してもらえましょう。つまり下の絵で見ても分かるように、瘻孔の内部から徐々に徐々にゴムの輪を自分の組織を破って外へ出していくという見事な免疫の働きに感動しませんか？）

手術			ゴムの脱落
			
<p>膿の通り道にゴムや糸を通します</p>	<p>ゴムがろう管を矢印の方向に切り開き中の膿が排出される</p> <p>膿が出きらない場合は水で洗浄します</p> <p>ゆるんだ分をしめます</p>	<p>きれいになったろう管が深部からゆっくり治ります</p> <p>括約筋が治りながら治療するので排便障害はほとんどありません</p> <p>ゴムはさらに、しめていきます</p>	<p>ゴムが取れたとき、表面に最後の切れた切開傷が残ります</p> <p>軟膏、ガーゼで保護しながら治療します</p> <p>この傷がふさがれば治療完了です</p>
<p>→ 痔瘻結紮法では深部が治りきるより早くろう管が開くように強くしめるので、ゴムが取れた時の創面がシートン法より深く大きくなります。</p>			

Ⅲ、クローン病と診断される（既に述べたように、彼は2012年の12月には完璧なクローン病になっていたのです。もちろんクローン病の始まりは、このときよりも数年前であったかもしれません。病気の診断は、本来病気の原因の診断と同じであるべきなのです。残念ながら、現代の病気の診断名はただ単に症状や、ときにはその症状を初めて見いだした人の名前を付けたりするだけで、全く意味がない診断名、つまり病名であります。従って意味のない病名が公式に22000種類もあるのです。だからこそ痔瘻とクローン病は別々の病気だと診断される誤りもおかされるのです。さらに診断名が間違った治療という大きな過ちをおかすキッカケになってしまうのです。

病気を診断するのは病気を治すためにつけられるべきであります。その病気を起こす原因が追究されないかぎり、間違った治療がその診断名のもとで行われる糸口を与える病名となってしまうのです。クローン病や潰瘍性大腸炎の場合は、お偉い大学の教授先生が「原因が分からない病気である」と言ってしまうと、誰も異論を挟まないどころか、なぜクローン病が生じるかの原因を知る努力さえも医学会は放棄してしまうのです。原因が分からない、従って一生治せないという言い分には全く論理がありません。しかし私以外の医者はこの矛盾した論理の展開に疑問を挟む人は誰もいないのです。原因がなく病気が起こることがありえないにもかかわらず、クローン病のように何十年も原因が分からない難病だと簡単に済ましてしまう医学者の心の冷たさにはゾッとする以外に何を感じればよいのでしょうか。ヘルペスが原因であるメニエールなどは120年以上も原因が分からなかったし、今も分からないと言いつけられているのです。悲しいことです。

ここで、クローン病や潰瘍性大腸炎で最高の治療法となるIVHについて述べておきます。私の患者さんの数多くは、クローン病や潰瘍性大腸炎で入院している間に食事がとれなくてIVHだけしかやれない患者さんがたくさんいます。IVHは要するにIntravenous Hyperalimentationの略語であり、日本語では中心静脈栄養法とか静脈内高カロリー輸液療法と訳されています。これは末梢の静脈ではなくて、心臓に近い中心にある静脈に挿入されたカテーテルを介して、蒸留水に糖、アミノ酸、脂肪、ビタミン、ミネラルなどを溶かした栄養素の輸液を注入して、食事を摂らなくても完全な栄養を供給できる方法であります。このIVHをやった後に、全てのクローン病（CD）や潰瘍性大腸炎（UC）の患者の炎症所見が消えてしまうにもかかわらず、従ってIVHが最高のCDやUCの治療法であるにもかかわらず、絶対に積極的にやろうとしないのです。なぜでしょうか？答えは簡単です。お金が儲からないからです。すぐに医者たちは1回20万円もする抗TNF- α 剤であるレミケードやヒュミラをしつこく勧めるのです。やるたびに国の財政も赤字になるばかりです。しかも治せない累積患者がどんどん増える訳ですから、医療費で国家財政が傾いていくことも何も不思議ではありません。

皆さん、TNF- α は一体何であるかご存知ですか？TNF- α こそ異物が人体に入った時にその異物を食べた大食細胞や樹状細胞が、最初に作り出す最重要のサイトカインであります。この最最重要であるサイトカインであるTNF- α の働きをなくすことは、異物を処理する免疫の軍隊の手足をもぎ取り、麻痺させることなのです。どうして体を守る軍隊が活動できなくて病気を治すことができるのでしょうか？絶対に無理です。大食細胞や樹状細胞の免疫の遺伝子の発現の結果生まれたタンパク質のひとつであるTNF- α の働きを完全にもぎ取ってしまうとどうして病気を治すことができるのでしょうか？確かに見かけの戦いはなくなり、一時的に症状は楽になりますが、一生このような病気を治せない薬を続けざるをえないのです。しかも20~30回続ければ効力がなくなるのみならず、抗TNF- α は人間にとっては異物でありますから、この人工的な異物を排除する為にレミケードに対して抗体ができてしまい、ショック死することもあるのです。“行きはよいよい、帰りは死ぬまで地獄”ということになるのです。だってこの薬で病気が治るどころか、一生治らない病気にさせられてしまうからです。

それでは大食細胞や樹状細胞をどんな異物を食べて戦いを始めだすTNF- α を作り出すのでしょうか？このような疑問を解決することが病気を治す唯一の道であるにもかかわらず、現代の医学者はそれをも放棄してしまっています。その答えは、それこそ文明が作った化学物質であるのですが、医学者は口が裂けても、化学物質が膠原病であるCDやUCの原因であることを言えないのです。なぜならば彼らが売りまくっている薬は全て製薬メーカーが作っている化学物質であるからです。

皆さん、ここでIVHがなぜ最高の治療法であるかお分かりになりますか？この答えは極めて明白です。化学物質が一切入っていない蒸留水に溶かされた純粋な高栄養素であるからです。化学物質の一切入っていない水と栄養はたっぷり入っていますが、化学物質は何一つ入っていないからです。こんな簡単な真実を東大や京大のお偉い方は知らないはずはないのですが、いえないのです。だって世の中は真実で動いている訳ではなく、金で動いているからです。残念ですね、悲しいですね

それではどのようにしてCDやUCを治すことができるのでしょうか？これも極めて簡単です。この説明は同時に、なぜレミケードがCDやUCの見かけの症状をなくすことができるかの説明にもなりますからしっかり読んでください。治すためには全て患者の免疫の働きに任せればいいのです。さきほどTNF- α の話をしました。このTNF- α は自然免疫のひとつであるNK細胞にひつつくと、NK細胞にインターフェロン γ (IFN- γ)をどんどん出させます。するとこのインターフェロン γ (IFN- γ)は骨髄で作られた後天免疫に属するナイーブT細胞をIgGを作るTh-1に変えてくれます。するとTh-1細胞は自分自身でインターフェロン γ (IFN- γ)やTNF- α やインターロイキン2というサイトカインをどんどん作って行きます。とりわけインターフェロン γ (IFN- γ)は骨髄で作られたばかりのBリンパ球にIgMをIgGに変えなさいという命令を出します。これもIgMからIgGへの抗体のクラススイッチとよびます。このIgG抗体こそが殺しの抗体であり、この抗体を作らせないようにすれば炎症は起こらないので、CDやUCの患者に抗TNF- α 剤であるレミケードを注射するのです。

皆さん、分かりますか？TNF- α があつてこそインターフェロン γ (IFN- γ)が作られ、インターフェロン γ (IFN- γ)があつてこそIgGが作られるのです。さらに話を進めましょう。このIgGをBリンパ球が作り続ける限りは、CDやUCは絶対に治らないのです。IgGは本来細菌やウイルスを殺すために作られるべき抗体なのであります。免疫は異物である化学物質さえをも、はじめはすべからず殺すべき敵だと認識するのです。ところが化学物質は無限に入ってきますから、もともと死んでいる化学物質を殺すことはできません。従ってその化学物質はいつまでも組織に残ります。この残った化学物質を免疫はどうすれば良いのでしょうか？皆さん考えてください。免疫は殺すのではなくて排除するという抗体を作ることによって気づくのです。つまり殺しのIgGから排除のIgEにクラススイッチすれば良いのです。

さあ、IgMも殺しの世界の抗体ではありますが、より効率のいい殺しのIgG抗体に変えるのはインターフェロン γ (IFN- γ)でした。それではIgGをIgEに変えるには誰が何を出世れば良いかを教えてあげましょう。殺しの世界で敵を食い荒ら

すのは大食細胞であることはご存知でしょう。それでは排除の世界でヒーローになる細胞は何でしょうか？それは肥満細胞といわれるマスト細胞であります。このマスト細胞は皆さんご存知の、痒みの原因を作る様々な化学物質を作っていますが、その代表はヒスタミンであります。それに加えて、インターロイキン4 (IL-4)というサイトカインをどの細胞よりもいち早く作ることができるのです。それではどのようにしてマスト細胞はインターロイキン4 (IL-4)を作るのでしょうか？

さあ、クライマックスにやってきました。先ほど述べたようにIgGを作り続けても、化学物質はますます組織に溜まり続けるだけです、IgGもどんどん作られ続けるだけです、実はマスト細胞はこのIgGと結びつくことができるのです。他の殺しの仕事をする大食細胞や好中球やNK細胞や補体は上手にIgGと結びついて敵を殺す力を得ることができます。ところがマスト細胞は大量に作られた残りのおこぼれのIgGとやっとなら結びつくことができるのです。このIgGと最後に結びついたマスト細胞は、自分の出番であることに気づくのです。つまりやっとなら人体に入ってきた敵が殺すべき敵ではなくて、排除すべき敵であることを悟るのです。さあ、IgGが自分の膜のレセプターに結びついてはじめて自分の仕事を始めるのです。それがインターロイキン4 (IL-4)を作ることなのです。

なぜインターロイキン4 (IL-4)が必要なのでしょうか？それはT細胞に大量のインターロイキン4 (IL-4)を作らせてIgGを既に作っているBリンパ球にクラススイッチをさせてIgEを作らせるのは、インターロイキン4 (IL-4)の命令がBリンパ球に絶対必要なのです。そのためには、誰かにまずはじめにインターロイキン4 (IL-4)を作らせなければならないのです。それがマスト細胞であるのです。さらにT細胞はIgGをB細胞に作らせるためにはTh-1になる必要があったのはご存知でしょう。今度はT細胞はIgEをB細胞に作らせるためにはTh-2になる必要があるのです。T細胞がTh-2になるためにも、インターロイキン4 (IL-4)が必要なのです。T細胞はマスト細胞よりも圧倒的に数が多いので、マスト細胞で作られたインターロイキン4 (IL-4)と結びつくと、自分自身がBリンパ球にクラススイッチする中心的な役割を果たし始めるのです。マスト細胞よりもはるかに多いナイーブT細胞はインターロイキン4 (IL-4)と結びつくと、Th-1リンパ球ではなくて、Th-2リンパ球に変身し、自分自身もインターロイキン4 (IL-4)を大量に作り出すのです。大量に作り出されたインターロイキン4 (IL-4)は今度はBリンパ球と結びついて、徐々に徐々にIgGからIgEに作り替えさせていくのです。このようにして殺しのIgGの世界が排除のIgEの世界へと変わっていくのです。症状的には痛みの世界が痒みの世界であるアトピーや、鼻水の世界であるアレルギー性鼻炎や、涙の世界であるアレルギー性結膜炎、咳の世界である気管支喘息へと変わっていくのです。

どうですか？皆さん、理解できましたか？膠原病とアレルギーとは同じ化学物質と戦い、ただ武器がIgGとIgEの違いがあるだけだということがお分かりでしょう。難しいですか？しかし何回も読んでもらえれば完全に理解できるはずです。なぜならば免疫の働きほど論理的な真実に基づいた世界はないからです。皆さん、この真実を誰から学んだかご存知ですか？あなた方、患者さんからなのです。患者さんの免疫から、いや免疫の遺伝子から学んだのです。病気を治すのは医者でも薬でもありません。上に述べたような免疫の真実で病気を患者さん自身が治していくのです。

さらに話を進めましょう。IgGからIgEにクラススイッチしたあとにいつまでもアトピーや喘息や花粉症を続けるのでしょうか？いや違うのです。さらに38億年かかって作り上げられた人間の免疫の遺伝子はそんな無駄なことをやり続けられないように出来上がっているのです。つまり最後は共存の世界へと導いてくれるのです。死ぬわけでもない化学物質に対していつまでも排除し続ける意味がありますか？全くないのです。アレルギーが全くない人でも同じ化学物質が毎日毎日侵入してきますが、彼らは症状がないからといって苦しみますか？死にますか？そんなことは絶対ないでしょう。つまり彼えらと同じように化学物質と共存すればよいだけの話なのです。この免疫の現象を自然後天的免疫寛容と私が発見し、名付けたのです。

さあ、免疫寛容はどのようにして起こるのでしょうか？実は殺しの世界であるTh-1リンパ球とIgGの支配する世界から、排除の世界であるTh-2リンパ球とIgEの世界になったときに、既に免疫寛容の兆しは見えているのです。もちろんTh-2リンパ球が免疫寛容を起こす主人公ではありません。あたらしヒーローが必要なのです。それがレギュラトリーT細胞であります。このレギュラトリーT細胞がインターロイキン10(IL-10)とTGF- β というサイトカインだけを専ら出すことによって、あらゆる免疫の細胞に「今起こっている戦いをやめなさい」という指令を出すのです。実はTh-2リンパ球は既に、大量ではありませんが、インターロイキン10(IL-10)とTGF- β を作り出しているのです。つまりTh-2リンパ球は排除の世界を作り続けるために、インターロイキン4(IL-4)以外にインターロイキン5(IL-5)、インターロイキン13(IL-13)などを作ると同時に、実は少量のインターロイキン10(IL-10)とTGF- β を作っているのです。これは何の意味を持つと思いますか？皮膚目の粘膜や鼻の粘膜や喉の粘膜から化学物質を出し続けても出し尽くせないということが分かれば分かるほど、インターロイキン4(IL-4)、インターロイキン5(IL-5)、インターロイキン13(IL-13)などの排除のサイトカインも増えるとともに、同時にインターロイキン10(IL-10)とTGF- β も多く産生されていきます。大量に作られたインターロイキン10(IL-10)とTGF- β は何をするのでしょうか？まさに骨髄で毎日作られているナイーブT細胞に結びつくと、このナイーブT細胞をレギュラトリーT細胞に変えてしまうの

です。レギュラトリーというのは抑制という意味があり、全ての免疫の戦いを抑制する仕事をするのです。このようなレギュラトリーT細胞を、ときには「Inducible レギュラトリーT細胞」といいます。“インデュシブル”という意味は“免疫の反応の結果、誘導された”という意味で使うのです。“インデュース”という言葉は“誘導する”という意味があることはご存知でしょう。

以上に説明したように、免疫は化学物質に対して、ある意味では無駄な戦いをやり続けるのですが、最後は免疫寛容を起こしてくれる誘導された（インデュシブルな）レギュラトリーT細胞を作ることによって、その戦いをやめて共存の世界に突入するのです。皆さんの免疫の遺伝子がものすごい力を持っているかがお分かりになったでしょう。医薬業界は金を儲けるために38億年かかって出来上がった免疫の遺伝子を変えようとして必死の研究を続けています。なぜ変えようとするのでしょうか？言わずと知れた金儲けのためです。資本主義的医療を永遠に継続するためです。そのためには患者の免疫に病気を治さしてはならないのです。病気を治すのは患者さんの免疫だけであることは全ての医学者が知っているのですが、口にだしては言えないのです。医薬業界こそ資本主義の権化というべき世界です。

皆さん、病気が治れば誰が一番得をしますか？患者さんです。病気が治れば誰が一番損をしますか？医薬業界です。医薬業界は38億年にわたって進化した免疫の遺伝子を完全にコケにしております。病気を治すのに一番偉い人は患者さん自身であり、患者さん自身の免疫の遺伝子しか病気を治すことはできないのです。その遺伝子の働きを変えようとする医者や薬が病気を作っているのです。皆さん、製薬メーカーに免疫を上げる薬を作ってくれとお願いしましょう。厚労省に頼みに行きましょうよ！残念ながらそれは全て無駄です。悲しいことです。病気は自分で治せば良いのです。

つい最近、素晴らしい書物が出ました。『医学部の大罪』という著書です。著者は誰だと思いませんか？東大医学部出身の精神科医である著名な和田秀樹氏です。必ず読んでください。彼は私と違ってはぐれ者ではありませんから、これからどのようなプレッシャーが医薬業界から彼にかかるのかお楽しみです。そのプレッシャーに対してどのように和田秀樹氏が対処されるのかも見物です。この書物の名前は、本来は『東大医学部の大罪』とすべきだったのです。そうすればこの本は100万部を超えるベストセラーになるでしょうに、と残念に思います。）

違和感を覚えたのは、2013年5月頃で、下痢と腹痛があり、再燃（症状が悪くなる）と寛解（症状が良くなる）を繰り返しました。9月頃に、発熱と体重減少（栄養障害）が起こってきて、症状がみるみるうちに悪化しました。病院に行っても原因がよく判らないので、大腸内視鏡検査を受ける事になりました。

(痔瘻の手術が2012年の12月頃、本格的に症状が出だしたのは半年後の2013年5月であります。クローン病は突然に発病する病気でないことはお分かりでしょう。治療もしていないのに再燃と寛解が起こるのはなぜでしょうか？説明しましょう。クローン病は自分の免疫を自分自身で抑えることによって生じるということを実証してあげましょう。この文章をお読みになられた皆さんは、彼がいかにも優れた男であるかがお分かりでしょう。言うまでもなく、彼は最初に出会った時になんと素敵なお男かと思ったほどの好青年です。責任感が強くまっすぐで仕事に対しても真面目すぎる男です。残念なことに、彼は自分の素晴らしさや才能については気づいていない男であるのが玉に傷といえるでしょう。他人に対する配慮や思いやりも、今時の若者にしては珍しいほど持ちすぎています。話を聞いてみますと、残業も会社に言われるままにこなし、かなり不規則な生活をせざるをえなかったようです。若い人ですから、情熱に任せて心も体も酷使していたのです。つまり自ら様々なストレスに耐え続けていたのです。ストレスに耐え続けている間はステロイドホルモンが最大限に出続けています。大量のステロイドホルモンは免疫の働きを抑えてくれているので、既に出来上がっていたクローン病はこの間は寛解の状態になります。ところが人間自身が自分で作っているステロイドホルモンの量は脳の視床下部で監視されています。ある限界を超えると視床下部は副腎皮質にステロイドホルモンを作る命令を伝えてくれるCRHというホルモンを作ることをやめてしまいます。CRHは、“Corticotropin-Releasing Hormone”といい、その略語です。このCRHが出なくなると、副腎皮質でステロイドホルモン(コルチゾール)を作ることができなくなります。すると免疫の抑制もなくなり、自己のステロイドホルモンに対する離脱症状が起こります。これをリバウンド、つまり反跳現象といったり、再燃というのです。これを彼は何回も繰り返したのです。つまりその間、彼は自分で病気を作り、自分のステロイドホルモンで間違った治療をしていたのです。この真実を世界中の医者は誰も口にしません。

人工合成ステロイドを作った3人の学者であるヘンチ、ケンドール、ライヒスタインは1950年にノーベル生理学・医学賞を受賞しました。ステロイドは未だかつて病気を治したことはないのですが、今なお医者の間では最も人気のある薬です。一時的に遺伝子の働きを止めて見かけの症状をとるので患者は満足しますが、つまり寛解を起こすことができますが、ステロイドをやめると再び再燃するので病気はどんどん深刻になり絶対に治らないのです。新たに人工的遺伝子病を作ることになるからです。1950年にノーベル賞が授与された人工合成ステロイドホルモンであります。64年も経っていますがステロイドを悪し様にいうのは世界で松本仁幸だけです。ステロイドはとんでもない毒薬であるにもかかわらず、なぜ医薬業界で最も人気のある薬になり続けることができたのでしょうか？それはステロイドを使うとやめることができないので、医薬業界に莫大な富をもた

らしたからです。つまりステロイドこそ病気を作る張本人であるからです。

ついでにはぐれ者のつぶやきを書いておきましょう。iPSはステロイドと比較にならないほど38億年かかって作り上げられた遺伝子を変えています。再生医療に使われるという大風呂敷を広げられている細胞ですが、何を再生するのでしょうか？本当に遺伝子を変えて全く遺伝子の異なる細胞を作って新しい臓器や組織を作ることが可能だと思いますか？ステロイドと同じように一時的には新しい細胞であるように見えるでしょうが、必ず遺伝子の修復が起こりリバウンド、つまり細胞の逆戻りが起こることを予言しておきましょう。しかしながらステロイドよりもはるかに莫大な利益をもたらすことも予言しておきましょう。その原資は誰が払うのでしょうか？国民の医療保険費という税金です。日本は既に国家財政がGDPの200%を超えています。安倍内閣は景気を良くするために2014年の日本国の予算額が史上最高の100兆円に近づきました。国債をどんどん増刷しています。その借金は誰が払うのでしょうか？若い人であり、子供であり、子孫代々にしわ寄せがいくことになるでしょう。

中国に負けないために安倍総理はがんばっているようですが、13億の中国人と戦争をして果たして勝てるのでしょうか？アメリカは日本と仲良くするよりも中国と仲良くした方が国益になるとこっそりと考えていることをご存知ですか？必ず負ける戦争はやるべきではありません。中国と戦争をして勝てるならばやっても良いと思いますが、勝っても負けても結局不幸になるのはいずれにしろ国民だけです。安倍首相が唱える積極的平和主義ではなくて、今まで通り絶対的平和主義を通すべきです。中国も米国とも仲良くやっていく道を模索すべきです。第2次世界大戦の教訓がまだ理解されていないようです。残念でたまりません。)

検査では、内視鏡所見で「クローン病の疑いあり」と言う事で生検（細胞検査）をしました。この時既に自分は、もし自分がクローン病だったらインターネットで調べて、松本医院でクローン病の治療をした患者さんの手記を拝読して、松本医院でクローン病の治療を受ける事を決意していました。それ以上にクローン病らしき症状を自覚していたので、念頭に置いていました。（こんな生検もやる必要は全くないのです。現代の文明の病気の原因は化学物質とヘルペスウイルスしかないからです。生検をしようがしまいが、結局現代の医療は治す医療ではなくて治せない医療をやり続けるだけで、患者が苦しみ、医薬業界が儲かるだけです。何のための診断をするのでしょうか？アトピーの患者さんに対して、果たして皮膚生検をやるのでしょうか？やるわけではないでしょう。腎炎の患者さんの診断をする際にも、どんなタイプの腎炎かを見るために余計な腎生検をどこでもやります。腎臓は一度傷つくと必ず足細胞も傷つきますから、傷ついた足細胞は分裂できないので、絶対に腎生検をやってはならないのです。腎臓の足細胞を殺すことは、さらに元の腎炎を悪化させるだけなのです。腎炎については[腎炎についてのコラ](#)

[ムを読んでください。\)](#)

無事検査は終わり、1時間程休養をして病院を後にして、松本医院へ向かう事にしました。

IV、松本医院の存在と治療

クローン病の事について検索していると、松本医院でクローン病を完治させた患者さんの手記がヒットしました。キーワードは「クローン病完治」です。

松本理論や手記を拝読していても、正直に言うと半身半疑でした。(大学病院をはじめとする大病院で「クローン病は絶対に治らない」と教育されているのですから、私のように吹けば飛ぶような医院の院長がどれだけ一生懸命「患者の免疫が一番大事である」とか、「免疫を抑えると病気が治らない」と絶叫したところで半信半疑であるのは当然です。特に私のホームページを読んでおられなかったと思われるお母さんの顔つきは、まさに疑心暗鬼の顔つきでした。しかし苦しいリバウンドを乗り越え、徐々にご子息の自覚症状がとれ、採血のデータがよくなるにつれて、お母さんの顔つきも少しずつ私に対する信頼の顔つきに変わっていきました。)それでも何とかしたいと思い、松本医院の門を叩く事にしました。松本医院の門を叩いたのは、2013年10月2日です。中に入ると、漢方の香りが印象的でした。そして松本先生と対面しました。予想通り、情熱的で熱血漢溢れる先生でした。(私も彼に対する初対面の印象は、ハンサムで、真実の治療を求めてクローン病を治したいという情熱で溢れている、とても頭の回転が早く知的な好青年でありました。)

現代の医療をなんとかしたいという信念を貫き通す現代の「坂本竜馬」のような方です。この時衝撃的な事実を思い知らされました。(明治維新の英雄である坂本龍馬になぞらえてくれたということは、ひょっとすれば私は間違った現代医療を維新する医療界の坂本龍馬になれそうでしょうか？ワッハッハ！！)

それは・・・

- ① 現代の医療は医者と製薬会社が儲かる仕組みになっている事。(これについては既に何十冊も他の現代の医療を憂う医者や評論家によって指摘されていることです。先程述べた和田秀樹氏が書いた『医学部の大罪』の本にも嫌ほど書かれています。)
- ② 医者は本来患者の病気を治す立場でありながら、医者自らが患者に病気を作り出している事。(その根拠はあちこちで書いていますが、結局病気を治してしまえば医薬業界が持たないというのが最も大きな根拠です。資本主義である以上は、金を持った人たちが世界を支配することができるからです。人間はエゴを満たすために生きているのでありますから、エゴを満たす最大の武器は金であるからです。これは人間存在の目的の非常に簡単な結論であります。もし私の医療が世界に広まれば、つまり病気は自分の免疫で治すものだという真実が広まれば私も失業してしまうでしょう。いいじゃないです

か？病気を作る医療などは不必要でしょ。）

- ③ クロウン病は化学物質ないしストレスが主な原因だと言う事。（この言い方は語弊があります。化学物質が原因であり、この化学物質を認識する遺伝子の多様性を持った人が、ストレスに耐える為に出し続けたステロイドホルモンが膠原病を作ったと書くべきです。その説明は上の文章をじっくり読んでください。）
- ④ 人類の天敵は化学物質とヘルペスウイルスで医者はその事実を黙秘している事。（その通りです。化学物質を作るのも製薬メーカーであり、ヘルペスを増やすのも製薬メーカーが作るあらゆる種類の免疫抑制剤であります。）
- ⑤ 現代医療の権威が治る病気を治らないと言ってしまえば、治らない病気になってしまう事。正に「鶴の一声」と言った所でしょうか。如何に自分が無知だったかで恐怖感を感じました。確かに「病氣」という漢字の語源は氣（メンタル）に病む意から成り立っているので、松本理論に書かれている事は 領ける気がします。（その通りです。気を保つためにステロイドホルモンが絶対に必要なのです。気を張りすぎるとステロイドホルモンが過剰になり免疫が落ちて、あらゆる敵が人体で増え続けるからです。にもかかわらず製薬メーカーは免疫を落とす薬しか作れないために病気が永遠に増え続けるのです。薬は病気を作るという意味において、全て毒薬のオンパレードであります。しかしながら死ぬか生きるかの緊急事態においてのみステロイドは必要であるのです。）初診は、血液検査と診察がありました。血液検査の結果はCRPが7.8（正常値は0.3以下）と遥かに正常値を上回り、血沈も高く、総合的にクロウン病だと診断されました。ちなみに、生検の結果ではクロウン病の所見なしという事でした。それでもクロウン病の火蓋が切られているのは明確であったので、クロウン病の治療をして行く事になりました。（クロウン病の診断は、腸の生検により得られた細胞診によるものではないのです。それでは「このような彼の病気はなんという病名をつけるのですか？」と前の病院の先生に聞くべきです。もちろんその答えは「何も分からない」ということになるでしょうが。従って「クロウン病よりもひどい難病です」と言われるのがオチでしょう。ワッハッハ！ましてや大腸は見ても小腸は見ているはずですから、ますます局所的な細胞診は意味がないのです。もちろん炎症のある部分の組織と細胞を切除して顕微鏡で見たはずですから、必ず炎症があるのです。「その炎症の原因は何ですか？」と質問したら、病理学者は「分からない」というだけでしょう。実はクロウン病と潰瘍性大腸炎を分けることが明確にできる特異性を示す細胞診断は何もないのです。病理学者によってCDと診断してみたり、UCと診断したり、異なることは日常茶飯事です。従ってますます腸管の生検は不必要なのです。

細胞診ではクロウン病でないと言われたのですが、それでは他の何の病気ですかという診断もない訳ですから、私の治療というのは要するに化学物質

と共存するまで患者さんの免疫を上げることだけです。免疫を上げる治療は漢方薬と鍼灸と、さらに大事なことは心のあり方です。この手記を読むと心のあり方については一言も触れられていません。私がいつもCDやUCの患者さんに出会ってまず言うことは、「君の心が病気を作ったのだ」という言葉です。何年か前からの自分の生活をまず省みて、自分の生き方を変えなければならぬとしつこく言い続けるのです。その心のあり方について一言も書かれていないのは、素敵な手記ではありますが画竜点睛を欠くというきらいがあります。彼がこのような病気になったのも、自分の心のあり方を見ることが少なかったからであり、見なくても自由で楽しい生活を満喫していたのでしょうが、そのような心のあり方がこの手記を書く際にも知らず知らずのうちに出てしまったのかもしれませんが。自己中心的な若者ではないので、このような心のあり方が病気を作ったかについては無頓着だったかもしれません。この手記は中間報告であり、仕事も一応できるようになった時点での手記でありますから、完璧に自覚症状も炎症所見もなくなったときには、どのように自分の免疫で治したかを語ってもらいたいものです。

心というのは脳の働きです。脳の働きが免疫を抑えるステロイドホルモンの量をきめるものです。ステロイドを脳が出せという命令が少ないほど病気は少なくなり、幸せになれます。ステロイドを脳が出し続けなさいというストレスの多い生活をするとうる病が起り、不幸になり、かつガンにもなりやすくなります。免疫は下げることは簡単であります。ストレスをかけられればかけられるほど免疫は下がります。それでは免疫を上げることはできるのでしょうか？ストレスをなくすことが免疫を上げていることになるのでしょうか？違います。ただ免疫の働きが普通の正常な状態に戻るだけです。赤ちゃんにアトピーが非常に多くなりました。なぜでしょうか？赤ちゃんにストレスが多くなったからでしょうか？そうではありません。ストレスがないがゆえに膠原病にならずにアトピーになるだけです。つまり化学物質を異物として認識できる優れた遺伝子の多様性を持っているが故に、生まれてすぐにお母さんの母乳から入ってくる異物をIgEで排除しようとしているだけです。何も免疫が上がったからではないのです。ただ免疫が正しい仕事をしているだけであるのです。それでは漢方や鍼灸は本当に免疫を上げることができるのでしょうか？というテーマを別のコラムで書き続けていますから、そこを読んでください。まだ未完成ですが、最後には必ず答えを出してあげます。)

V、生薬とエレンタールと治療方針

初回で処方されたのは二種類の煎じ薬と栄養障害を改善するエレンタールでした。（エレンタールも農薬を使って作られた、主に大豆から作られているので

化学物質はたっぷり入っていますから、クローン病の原因物質である化学物質を入れこむこととなります。しかしながら下痢が続くと、必ずタンパク質をはじめ他の脂質や電解質、さらに水分も体内から減っていき栄養不良になります。とりわけタンパク質のアルブミンは減ると、免疫の抗体もできにくくなり、かつ血液の膠質浸透圧も維持できなくなり、むくみが出たり、脱水症状が出やすくなるので、アルブミンの原料となるエレンタールを飲んでもらうのです。アルブミンは食事から摂取されたタンパク質から肝臓で作るのですが、このアルブミンはBリンパ球が抗体を作るためにも絶対に必要なアミノ酸を含んでいるので、その素材であるタンパク源のエレンタールを飲んでもらうのです。さらにアルブミンは組織から水を引く力があります。これを膠質浸透圧といいます。減るとむくみがひどくなります。アルブミンはさらに様々な栄養素やホルモンを全身に運ぶ重要な仕事もあるので、原料であるタンパク質が必要となるのです。)

- ① 断痢湯（食前、下痢を止める）
- ② 千金内拙散（食後、痔ろうを良くする）

自宅では、この二種類の煎じ薬と温灸と薬湯で免疫を上げて行く治療で、通院では鍼灸をします。エレンタールは様々な服用の仕方がありますが、経口摂取する場合は飲みにくいので、個人的にはフレーバーやカルピス原液で割る事をお勧めします。マイルドな味わいになって、飲みやすくなります。治療方針は、東洋医学の真髄である漢方と鍼灸を駆使して、免疫を上げて行きましょう、と言う事です。

VI、ヘルペスウイルスとの闘いと強烈なリバウンド症状

その後、順調に自分の免疫が上がるのを自覚しながら、下痢は軽快して栄養障害も改善しました。しかし免疫が上がる過程で、体内でヘルペスウイルスとの闘いから強烈なリバウンド症状が露呈してきたのです。ヘルペスの症状では、突き刺すような痛みの腹痛と一日5回の下痢と口腔に無数のアフタ（潰瘍）が出る口内炎が発現しました。強烈なリバウンド症状は、39℃を超える高熱と倦怠感とCRPが10.01（正常値は0.3以下）まで上昇しました。これは腸管と口腔から来る炎症のようです。ヘルペスに関しては、ベルクスロン錠400という抗ヘルペス剤で闘いを有利化して、リバウンドはひたすら耐え抜きました。口内炎には、以下の煎じ薬が処方されました。

（彼はまさに免疫を抑えることによって現代文明病の原因をふたつとも増やしていたのです。化学物質を体に溜め込み、ヘルペスウイルスを増やし続けていたのです。上記の症状をひとつひとつ説明していきましょう。彼は以前から口内炎を繰り返していたようですが、そのときの治療はケナログというステロイドを口内に塗っていたのです。ケナログというのは商品名ですが、一般名はトリアムシノロンというステロイドホルモンであります。このステロイドホルモンを使えば

使うほど免疫は落ちて、アレルギーで化学物質を排除すべきであるのに、その働きも抑え、いわゆる抗体の逆クラススイッチをしていたのです。逆クラススイッチという言葉も私が作った言葉であります。クラススイッチとはIgGを実際にIgEに変えることでありますが、いわゆる逆クラススイッチというのはIgGがIgEにならないことを言っているだけなのです。現代のアトピーやアレルギーの治療は全てステロイドで行われていますが、いわゆる逆クラススイッチをさせようとしているだけなのです。従ってアレルギーの治療で長期にわたってステロイドを使ってきた人がどんどん膠原病になっていくのです。言い換えるとアレルギーになるということは、正しいクラススイッチが行われ、さらに免疫寛容を起こす準備態勢ができていく訳ですから、膠原病にならないという保証になっているのです。この事実も世界中の全ての医者は知らないのです。いや、間違えました。偉い大学の医者たちは知っているのですが、口に出さないだけだと言い換えた方が正しいのです。

さらにステロイドを使うことによって、とんでもない病気づくりに貢献していることになるのです。それは免疫を抑えることによって、知らず知らずのうちにあらゆる神経にヘルペスを増殖させてしまっているという罪を犯していることです。このような罪を犯しているステロイドが、なぜ1950年のステロイド合成に対するノーベル賞の受賞以来、許されているのか全く理解できません。ステロイドこそが病気造りの大真犯人であるにもかかわらず、世界中の医学者の誰一人として抗議しないのです。本当に残念です。ついでに言えば、レミケードやヒュミラを使ってきた人は大食細胞が作る免疫の出発点となるTNF- α の働きを抑えている間に、どれだけヘルペスウイルスが増えているかということをどの医者も患者に知らせないのです。さらに近頃は動物のプラセンタが大手をふって化粧品にも進出していますが、その間ヘルペスがどれだけ増えているかも誰も知らせないのです。これも残念なんことです。女性ホルモンが免疫を抑えてヘルペスを増やしていることを、どの医学者も一般大衆には知らせないのです。真実を語れば語るほど悲しい真実を暴露せざるをえないことが残念で残念でたまりません。もちろん彼も自分自身のステロイドホルモンやケナログでヘルペスウイルスをたっぷり増やしてしまっていたのです。このヘルペスとの戦いがものすごい戦いとなるのです。もちろん言うまでもなく、アスピリンやバファリンやロキソニンやボルタレンなどの痛み止めや解熱剤も全て免疫抑制剤ですから、その間にヘルペスがどんどん増えていることも付け加えておきましょう。さらに高血圧の人に、動脈硬化を防ぐということで少量のバファリンを飲まされている人が多いですが、彼らも少しずつ少しずつヘルペスが増え続けていることを知らされていないのです。残念です。[ヘルペスについての詳しい説明はヘルペスのコラムを読んでください。](#)

次に39度を超える高熱がどのようにして生じたか説明しましょう。既に発熱に

ついでに解説はどこかで書いたことがあります。もう一度復習のために書きます。発熱を命令する主なサイトカインはインターロイキン1 (IL-1)とインターロイキン6 (IL-6)であります。このインターロイキン1 (IL-1)とインターロイキン6 (IL-6)を内因性発熱物質といいます。大食細胞が産生する代表的なサイトカインがインターロイキン1 (IL-1)とインターロイキン6 (IL-6)であります。さらに先ほどTNF- α は大食細胞が作ると書きました。このTNF- α も発熱物質となるのです。このような内因性発熱物質は血液脳関門を通過し、脳の細胞の膜にあるアラキドン酸からプロスタグランジンを作り、このプロスタグランジンが脳の視床下部の体温調節中枢に働いて体温を高くさせ、免疫機能を高めるのです。化学物質であるハプテンとキャリアタンパクと結びついた複合体を大食細胞が食べると、インターロイキン1 (IL-1)、インターロイキン6 (IL-6)、TNF- α などの内因性発熱物質をどんどん出していくと、ときには40度にまで上がることがあります。高熱を出しながら免疫を高めているのです。発熱死という病死はないので、何も心配することはないのですが、子供のときから医者たちが「熱は怖い」と言いまくるものですから、一般大衆は熱が出ると恐怖に駆られてしまうのです。もちろん化学物質との戦いによる発熱は怖くないのですが、感染による場合は必ず抗生物質を飲む必要があるのです。いずれの場合も熱を下げる薬は絶対に飲んではならないのです！必ず高熱が出れば、私の携帯電話に電話をかけてくれるように番号あらかじめ教えてあげておくのです。解熱剤でどれだけ多くの人たちが訳の分からない病気で死んでいったのかを思うと、悲しくてなりません。ちなみにヘルペスとの戦いで熱が出るのは、カポジ水痘様発疹の場合だけです。単に口内炎で起こることは滅多にありません。37度2～3分ぐらい高くなることはよくあります。)

今日はここまでです。 2014/01/02

③ 清熱補血湯（食間、口内炎を良くする）

効果はすぐ現れました。ここまで強烈な症状が発現したのは心外でしたがリバウンドを乗り越えてヘルペスウイルスとの闘いが小康状態になりました。ある意味、試練だったのかも知れません。

（今、「なぜ漢方薬は免疫を上げるのか？」というテーマのコラムで、漢方医学史を中国医学上の漢方医を通じて紐解き始めましたが、[（そのコラムはこちらを読んでください。）](#)天才たちが作り上げた漢方処方、何万種類もあります。中国の漢方薬のみならず、韓国や日本の漢方薬を支えた天才たちがさらに多くの漢方薬の処方をあみだしました。

少し韓国漢方について述べておきましょう。韓国の東洋医学の最高峰に位置する『東医宝鑑』を編集した「許浚（きょしゅん）」という漢方医の一生を描いた

「ホジュン（許浚の韓国読み）」というテレビ映画が日本でも一時期人気になったことを覚えておられますか？韓流テレビ映画の走りだったのです。この『東医宝鑑』は、1613年に500年続いた朝鮮王朝のその当時の国王である「光海君」の命によって漢方医の許浚（きょしゅん）が作りました。この本によって中国医学の流れを汲む朝鮮医学が統合されると同時に、韓国における独自の漢方医学が確立されたのであります。この『東医宝鑑』は、韓国内のみならず、日本や中国でも西洋医学が導入されるまでの400年もの間、漢方医学の聖典として珍重されてきました。台湾においても、張仲景の書いた『傷寒論』よりも、許浚が書いたこの『東医宝鑑』が漢方医学書として、まるで中国の書物であるかのようにもてはやされてきたのです。日本では1724年に、この『東医宝鑑』が漢文のまま発行されたほどでした。漢方医学の本場の中国でも、清の時代の1766年に発刊されました。現代でも中国や香港や韓国では中医学コースと西洋医学コースに別れており、医師の資格が異なります。しかしながら西洋医学に進む医学生がはるかに多いのです。中国医学の発祥の地である中国人自身が、私のレベルまで免疫を抑えない漢方生薬や鍼灸の本質的な中国医学の良さを理解している中国や韓国や香港の医者はいないようです。残念ですが。アッハッハ！日本の医学部では、漢方科の授業はほとんど行われていません。薬学部で生薬学として勉強される程度であります。韓国や香港では医学部に漢方医学コースがあり、そこでは『傷寒論』をはじめ、『東医宝鑑』もテキストの一部として使われているようです。

この韓国漢方医学の最高峰である『東医宝鑑』に掲載されている処方も、何千種類あるのです。この『東医宝鑑』には、外科疾患、運動器疾患、皮膚疾患、耳鼻咽喉科疾患、眼科疾患、産婦人科疾患、小児科疾患、神経科疾患、消化器疾患、泌尿器疾患、血液疾患、伝染病疾患、呼吸器疾患、循環器疾患、代謝疾患をはじめとする、現代にもみられる全ての病気に対する漢方処方が網羅されております。

人間の病気というのは、感染症で始まり感染症で終わるのです。現代のように衛生状態が良くなったので感染症の感染源が全くなり、かつあらゆるウイルスや細菌が引き起こす重篤な感染症に対してはワクチンが開発され、しかもこれらの細菌による感染症が起こっても、優れた抗生物質が作られているので感染症で死ぬことはなくなったので、結論として病気は終わってしまったといってもよいほどです。

別のコラムで書いたのですが、魏の国の皇帝の曹操が、魏の国を作った後に、長年にわたって頭が痺れたり目眩がするという病気で苦しんでいたのですが、これはヘルペスによるメニエールであり、かつヘルペス性脳血管神経炎であったのです。中国の外科の元祖であるといわれるかの有名な華佗が鍼を曹操にしてあげると、即座に治ったという話をご存知ですね。現在もメニエールや頭痛で悩んでいる患者が多いのですが、これも言わずと知れたヘルペスが原因であるのですが、

この病気で死ぬことは絶対にはないのです。従って最後に残った死なないが一生不愉快さをもたらす感染症はヘルペスだけとなったのですが、世界の医学会は全ての人間のあらゆる神経に住みついているヘルペスが最後の病気の原因であるということを確認しようとしただけです。もちろん曹操の時代にも、ヘルペスは頭痛やメニエールを起こしただけではなくて、口内炎もいくらかでもありました。それに対しては既に様々な処方できていたのです。そのひとつがこの患者さんに出した清熱補血湯であったのです。中国医学は素晴らしいでしょう。

中国漢方や韓国漢方や日本漢方の過去に物された漢方医学の書籍をくまなく調べていけば、あらゆる症状に対して対応できるいくつかの漢方処方を見つけることができるのです。1798年のジェンナーによる天然痘のワクチンから始まる西洋医学の勃興から19～20世紀までは、口内炎の原因がヘルペス（ときにはカビであるカンジダが原因であることもあるのですが）であるなどとは知られていなかったのですが、現代医学では病気の原因は全て分かってしまったのです。昔の漢方医は原因も知らずして、ただ漢方を使っただけなのでありますが、実はそれが人間の免疫を上げて自然に治していたことも知らなかったのです。とにかく何とかして漢方生薬と鍼灸だけを用いて患者の病気を治そうとただけで、結果的には患者の免疫を上げることによって治るべき病気は患者に治させていたのです。現代の医療では口腔内の痛みに対してはケナログというステロイドを塗布されたり痛み止めを投与されるだけで、一時的に痛みは止まるのですが、その間ヘルペスウイルスが大量に増殖してしまっているのです。再び免疫が回復するとはじめよりも増殖したヘルペスとの戦いが神経で再開され、一生治らない痛みとして残ってしまうのです。どこの病院へ行っても原因が分からないとシラを切られて、最後はさらにステロイドや強い痛み止めを出されるだけの悪循環を続けるだけなのです。残念です。こうしてますます重篤な痛みで苦しむ患者が増え続けるのです。残念ですね。

私はあらゆる痛みに対して用いる処方、抗生物質か抗ヘルペス剤か漢方生薬や鍼灸しか使わないのです。これだけであらゆる痛みに対して対処できるのですが、医者を用いたステロイドや、患者自身がストレスに対抗するために大量に増やし続けた自分自身のステロイドホルモンのために、こっそり増殖したヘルペスが多すぎると、ときには難しい局面に出会うことがあります。漢方生薬を用い、同時に頻回に鍼灸をすることによって乗り切ることができるのです。この病気の代表が線維筋痛症という病気であり、この病気を診断された後に5年も10年も他の医者にかかり続けた患者さんは、ステロイドや痛み止めを止めさせると、そのリバウンドの痛みたるや筆舌に尽くせないぐたいです。この線維筋痛症の原因は謎であり原因不明だと大学の教授先生方は言い続けていますが、ヘルペスなのです。一介の開業医である私が言い切っても権威や権力が認めてくれない限りは白は黒となり続けます。残念です。免疫を抑える薬を続ける限りは病気が治らない

ことは大学医学部の教授先生方は全て知っているのですが、資本主義的運営を続けるためには最後に残された病気の原因がヘルペスであると口に出して言えないのです。本当にこの世の中はどうなってんの！と言ったところで仕方がないか。悲しいねえ～。

この21世紀の文明の世には、免疫が敗北し死んでしまうような病気の原因はなくなりました。痛みで死ぬことはないので、もちろん様々な不都合や不愉快さは伴うでしょうが、免疫を上げ続ければ、さらに患者自身が耐えしのでくれれば、痛みもいずれは消えてしまうのです。もちろんその不都合さや不愉快さにどれだけ耐え続けられるかは患者自身の問題であります。）

Ⅷ、アレルギー症状

その後、顔にアレルギー症状が出て来て、③の薬を中止、新たに煎じ薬が処方されました。（まさに私の理論通りに免疫は自分自身で正しい治療を進行させてくれます。膠原病であるクローン病がアトピーに変わることを、免疫の抗体レベルで「クラススイッチが起こった」といいます。このクラススイッチの遺伝子を去年の文化勲章受賞者でいらっしゃる京大の名誉教授の本庶佑先生が見つけたのにもかかわらず、アレルギーと膠原病は同じ敵である化学物質を抗体を変えて戦っていることを明らかにされないことは極めて残念です。つまりアレルギーはIgE抗体で戦い、膠原病はIgG抗体で戦っているということ、なぜ医学会で発表されないのかが理解できません。膠原病で用いられるBリンパ球が作るIgGが、抗体のクラススイッチによって、IgEを作る遺伝子をBリンパ球の細胞に世界で初めて見つけられたのは、まさに本庶佑先生ご自身でいらっしゃるのです。彼のような本当に偉い先生が「アレルギーと膠原病は同じ病気である」と医学会で発表されたならば、自己免疫疾患などはないということが世界中に知られるのに、残念で残念でたまりません。だってアレルギーの原因は、既に世界中の人が全て知っているからです。一方、膠原病の原因は分からないと言い続け、挙げ句の果てに「自分の免疫が自分の組織を攻撃している」という自己免疫疾患という病気をねつ造し続けて、アレルギー疾患と自己免疫疾患は別のものであると言い張っているのが世界の医学会の学者先生たちであります。悲しいことです。ちなみにこのIgEを見つけれられたのも、ノーベル賞候補にあがったことがある日本の医学者の石坂公成先生であることも付け加えておきましょう。石坂先生も膠原病とアレルギーは同じ病気あるということを一言も口にされていませんが、これも残念でたまりません。[自己免疫疾患はないというコラムを読んでください。勉強すればするほど、ますます自己免疫疾患はないという根拠が私の頭にたまっていきます。近いうちにその蓄積した証拠を吐き出すつもりです。](#)

ついでにクラススイッチの意味をもっと分かりやすく話してあげましょう。極めて簡単な話なのです。皆さんはハウスダストに含まれている化学物質に対する

特異的なアレルギー抗体であるIgEについては耳ダコでしょう。膠原病を起こすハウスダスト含まれる化学物質に対する特異的IgG抗体があるのです。検査しようと思えばすぐにこのIgG抗体の存在と量をも簡単に計れるのです。さらにもう一例を挙げれば、スギが運ぶPM2.5に対するIgE抗体の他に、スギが運ぶPM2.5に対するIgG抗体もあり、両者とも簡単にその存在と量を確定できるのです。こんな明々白々な真実を世界中のどの医学者も誰も口にしないのです。

ところが人間の免疫の遺伝子はこの真実を知っているのに、免疫を抑えない限りIgGからIgEに簡単にクラススイッチして、最後は自然後天的免疫寛容を起こして化学物質と共存できる真実を知っているのです。ですから自己免疫疾患といわれるクローン病の患者は、漢方や鍼灸で免疫を上げ続けられれば、すべからず必ずクラススイッチを行い、必ず痛みがアレルギーの痒みに変わって行くのです。皆さん、こんな簡単な真実が白昼堂々と否定されているのです。憤りを感じませんか？私だけが知っている話では全くないのです。真実を隠蔽する世界が医学会の学者の世界というものです。悲しいことですよ。と同時に恐ろしいことではないでしょうか？残念ですね。大事なことをここで付け加えたいのです。私の漢方や鍼灸がいかに免疫を元に戻そうとしても、患者本人の心がストレスを処理する心がけがない限りは絶対に治らないことも知っておいてください。私が病気を治すのではなくて、患者さんの免疫が治すのです。

この患者さんも私との出会いがなければ一生治らない病気として暗黒の人生を死ぬまで送らざるを得ないのです。こんな恐ろしい話が世界中に堂々と広まっているのです。おそらく世界中にクローン病の患者は何百万人もいるでしょう。医療の世界もグローバル化していますから、一番強くて偉いアメリカの医学者が「クローン病は原因が分からない、治らない」と言ってしまえば、それをいいことに、日本やヨーロッパや他の先進国の医学者も口を揃えて治らないといえます。何もこれはクローン病だけにはとどまりません。治るのに治らないと言い切られている難病はいくらでもあります。自己免疫疾患といわれる病気は本来ないのですが、アメリカの偉い言い出しっぺが「自己免疫疾患だ」と言えば、“皆右へならえ”で口々に「自己免疫疾患は治らない」と言い張ります。このような嘘に対して敢然と患者のために戦う医学者は誰一人として出てこないのです。だって自己免疫疾患は治らないということですから、どんな治療をしても許されるわけですから、自己免疫疾患の患者が死ぬまでお金が入り続けます。病気が治れば失業するのは医薬業界だけです。だからこそ嘘をつきまくって病気を作らざるをえないのです。どうしたらこんな世界を変えることができるのか、皆さん自分で考えてください。

医学が進歩していると医学者たちが喧伝し続けていますが、病気は増えるばかりです。なぜでしょう？38億年かかって進化した自ら命を守ってくれる免疫の遺

伝子を働かさなくさせる医学研究だけが大手をふっているからです。病気を治すのは自分の免疫であり、免疫の遺伝子であることを世界中の医学者の誰も口にしないのです。医者なんか要らないのです。病気を本当に治せる医者は免疫の働きであり、病気を治せる薬は免疫の遺伝子が作り出せる免疫のタンパクだけなのです。この両者とも傷つける医者がどうして病気を治すことができるのでしょうか？絶対に不可能なのです。ただ現代医学の名誉のために付け加えておきましょう。現代医学が作り出した価値ある薬は、抗生物質とワクチンと抗ヘルペス剤だけなのであります。ここではこれらの副作用については口を塞いでおきましょう。無駄なワクチンをやっ、I型糖尿病や様々な膠原病を引き起こしていることは書かざるを得ませんが。免疫万歳！免疫の遺伝子万歳！免疫の遺伝子こそ命の恩人です！)

④ 補中益気湯（食間、免疫を上げ、クラススイッチをしやすくしてアトピーになりやすくする。）

（元来、補中益気湯は病後に飲む最高の漢方として珍重されてきました。なぜ私がこの補中益気湯を使うようになったのでしょうか？それはステロイドをはじめ、あらゆる免疫抑制剤が人工的遺伝子病を作ってしまったためです。つまり医原病を作ってしまったのです。この医原病によって細胞の遺伝子が変わられてしまい、何とか元の正常な細胞に戻して下さいと叫んでいるのです。この叫びに気がついた患者さんたちが松本医院を訪ねてこられるのです。この傷ついた病を起こしてしまった細胞を再生するために補中益気湯を使うようになったのです。

異物が人体に入った時の正しい免疫の戦いを始めるためには、その敵を処理するために必ずその敵に対応した様々なタンパク質を作る必要があるのです。膠原病やアレルギーの場合は化学物質という異物であります。この化学物質を処理するために、免疫のタンパク質という軍隊を作る必要があるのです。その免疫のタンパク質を作るためには、「そのタンパク質を作れ」と命令する遺伝子がONになる必要があります。これを「転写因子の遺伝子が発動された」といいます。ちょうど敵の飛行機がくれば、それを知らせるサイレンのスイッチをONに入れるのと同じです。なぜ転写因子というかという、遺伝子はDNAという設計図で成り立っているだけですから、その設計図を実行し軍隊を作り動員する必要があります。そのためには実際に敵と戦う軍隊、つまり免疫のタンパク質を作らせる必要があります。次にその必要な設計図をそのタンパク質を作ることができる工場まで運ばせる必要があります。それがメッセンジャーRNA (mRNA) であります。このmRNAにDNAの情報を渡す必要があります。情報を渡すことを専門用語で「転写」といいます。どのように転写されるかという話は難しすぎてここでは語り尽くせません。転写調節因子といわれるプロモーター、エンハンサー、TATAボックス、DNAポリメラーゼ、シスエレメント、トランスエレメント、アクティベーター、リプレッサー、コアクティベーター、コリプレッサー、基本

転写因子など…思い浮かべて書き並べるだけでも、DNAにタンパク質を作らせるための諸段階の転写の仕事がいかに複雑なものであるかがお分かりになるでしょう。しかもこれだけ進んだ現代医学でも、いまだ転写のメカニズムの全てを完全には解明していないのです。にもかかわらず現代の医療は遺伝子を無理やり変える研究をやって病気を作り続けるだけなのです。遺伝子の働きを止めることほど簡単なことはないのです。ステロイドを入れれば、瞬時にして転写因子が一切働かなくなってしまうからです。

iPSを作る4つの転写因子というのは、人工的な最悪な転写因子といえるのです。この4つの転写因子は、生命が生き続けるために完璧に出来上がった遺伝子の発現のONとOFFという働きを訳も分からずに変えてしまったのです。そのためにそれぞれの細胞の遺伝子は何をどうしていいか分からなくなって、99.8%は癌細胞になり、0.2%だけが癌になりきれず、しかも訳の分からない細胞に変身してしまったのです。このお化けのような細胞をiPSと山中先生はつけられたのです。さらにこのiPS細胞も最後は修復遺伝子によって元の線維芽細胞に戻ろうとしてしまうのです。つまりこれがステロイドと同じくリバウンドと言う現象があります。つまりステロイドで免疫細胞の遺伝子を変えたところで、一時的に炎症は消えてしまうのでありますが、遺伝子が修復されてしまうと再び炎症が起こり元の木阿弥になってしまうのです。遺伝子を変えることは38億年かかって進化した遺伝子を変えるのみならず生命の根源であるDNAそのものを変えようとする暴虐そのものであります。遺伝子を人間の都合で自由に変えようとするのは生命そのものを否定することと同義です。iPSが再生医療に使われるという大風呂敷が広がっていますが、何回も書いていますが、iPSによる再生医療は遺伝子の修復というメカニズムによって必ず失敗することになるでしょう。1個の細胞である受精卵から200種類の分化した細胞にひとたびなってしまうと、それをiPSに変えたところで必ず元の細胞を記憶しているので、必ず分化した元の細胞に戻ろうとするからです。この真実はステロイドについても同じことなのです。ステロイドを使って一時的に免疫の遺伝子のONをOFFに変えて炎症をなくしても必ず元のONに戻ろうとするリバウンドが起こることと同じなのです。ステロイドで炎症をとっても、炎症を永遠に除去することはできないのです。それは炎症細胞がONからOFFに無理矢理ステロイドで変えられても必ずONに戻ってしまうからです。

遺伝子を変えることができるならば、私の醜い顔と悪い口とアホな頭と汚い心を変えてもらいたいものです。ついでに強い嫉妬心も持たない遺伝子に変えてもらいたいものです。ワッハッハ！！！！)

現段階では、既に顔でクラススイッチが始まっているようで、松本理論にも記述されている通り、アレルギー症状を自覚しているのは、IgGからIgEにク

ラススイッチをしている過程だそうです。つまり、一進一退の経過を辿りながら、着々と完治へと近付いてきている兆候という事なのです。

(その通りです。彼は私の理論を完璧に理解しておられます。その理論の証拠を目の当たりに見せつけてくれています。ただ彼にこの手記を書いてもらったのは、2ヶ月間の自宅療養の後、仕事ができるようになったので書いてもらったのですが、惜しむべくは、自分が自分のストレスに耐えるためにストレスホルモンを出し続けて、アレルギーを膠原病、巷では自己免疫疾患といわれるクローン病に変えてしまったのですが、そのいきさつについては一切ふれられていませんので、完治の時には詳しく書いてくれることを期待しています。

世界中で最も難しいといわれる膠原病は、ステロイドホルモンを出し続ける自分の心で作る、かつ製薬メーカーが作るステロイドを代表とする免疫抑制剤を出し続けることによって作っているということ、皆さんよくご理解ください。アレルギーも膠原病も同じ病気であり、現代のアレルギーの治療も、ステロイドはじめとする免疫抑制剤ですから、ステロイドホルモンを出させない心のあり方について、学校の道徳教育や保健教育でやるべきですが、学校教育の現場ではそんなことについては一言もふれられていないのが残念です。さらに小学校から免疫を抑える限り病気は治らないということも教えるべきなのです。病気は自分の免疫を自分で抑えて作ります。従って、その病気を治すのは自分の免疫を取り戻すことによって治すことができるのです。全ての病気は薬で治すことはできません。言うまでもなく医者が治すこともできないのです。医者は免疫をヘルプすることはできます。免疫をヘルプすることができ唯一の薬が漢方生薬であります。

漢方生薬は実は薬と言うべきものではありません。漢方生薬は農産品なのです。農産物を作るのには米と同じことで1年かかります。従って薬草である漢方生薬は、栄養素のみならず、その栄養素から植物自身が自分の身を守るために作った免疫成分がたっぷり入っています。薬草は医食同源といわれますが、実は医食同源+ α であります。この+ α が免疫向上成分であります。この両者を兼ね備えた料理が薬膳料理であるのです。薬膳料理は高いうえに美味しくないので人気はありませんが、実は最高級の食べ物といえます。この農産物である薬草は、今も昔も中国から輸入されています。実際的には100%中国から輸入されているといっても過言ではありません。中国が日本を超えて第2位の経済大国になってしまいました。中国政府も漢方薬の良さが分かり、かつ中国人の生活が豊かになるにつれて、中国内での漢方薬の消費量がうなぎ登りになっており、かつ西欧でも使われ始めたので漢方の輸出先は日本だけではなく世界中に拡大していますから、日本への輸入量が減少しています。日本政府もこのことに気づき、日本国内でも漢方生薬を作らせる努力をし始めました。

こんな努力は実はあえてする必要はないのです。なぜならば現在の漢方生薬は

エキスも含めて無駄に使われているので、無駄な漢方薬の使用を止めるだけで漢方薬は充分すぎるほど日本にあるのです。その意味は一体何かについて説明しましょう。

漢方薬だけが免疫を上げるのにもかかわらず、同時に免疫を抑える製薬メーカーが作る、いわゆる西洋薬が使われています。こんな漢方薬と西洋薬の同時使用は全く意味がないのです。これをやめさせるだけでも、日本の漢方薬の原料は充分に余るぐらいです。本当に患者の病気を患者自身に治させたい医者ならば、漢方薬を使う以上は、絶対に免疫を抑える西洋薬は使わないはずなのです。いや使ってはならないのです。使ってよい西洋薬は、ワクチンと抗生物質と抗ヘルペス剤だけであり、製薬メーカーが作る薬の中でこの3つだけが免疫をヘルプできるのです。病気を治すために医療があるのですが、病気を作るために漢方薬と西洋薬が同時に使われているのが残念でなりません。それではどうして免疫を上げる漢方薬と免疫を下げる西洋薬を同時に使ってはならないかをもっと詳しく説明しましょう。その答えをズバリ答えてあげましょう。

免疫を抑えるという西洋薬は実際にどのようにして免疫を抑えているのでしょうか？さきほど転写因子の話をしましたね。敵が人体に入ったら、その敵をやっつけるために、敵の情報を遺伝子に伝えることによって、様々なタンパク質ができると言いましたよね。例えば熱が出たとします。この熱はどうして出るのでしょうか？インターロイキン1 (IL-1)やインターロイキン6 (IL-6)のような熱を出させるサイトカインが人体の様々な細胞が作ります。このIL-1やIL-6が様々な細胞のレセプターにひっつきます。とりわけ視床下部にある温熱中枢の神経細胞に結びつくと、その情報が神経細胞の核の遺伝子に伝わり、プロスタグランジンという生理活性物質を作らせます。このときに西洋薬の解熱剤を使えばどうなるのでしょうか？この解熱剤は、上に述べたIL-1やIL-6の仕事させないのです。これらのサイトカインが結びつく細胞の受け皿をレセプターといいます。このレセプターにバファリンやロキソニンなどの薬が先に引っ付いてしまうと、熱を出させる情報が核の中にある遺伝子に伝わらなくなって熱が出なくなるのです。つまりこのようなレセプターにひっついて本来の敵をやっつける仕事をさせなくする薬をアンタゴニストといいます。この意味で全ての免疫を抑える薬はアンタゴニスト（拮抗剤）といいます。なぜ拮抗剤といわれるかというと、遺伝子の働きに敵対するからです。世界中の製薬メーカーは99%このアンタゴニストを日夜作り続けているだけなのです。

一方、漢方生薬の成分は何をするのでしょうか？西洋医学とはまるで反対の仕事をします。漢方煎じ薬の様々な成分が、敵が入ってきた時の熱を出させる様々な細胞のレセプターに結びついて、IL-1やIL-6などのサイトカインやプロスタグランジンなどのタンパク質をもっと作れと命令するのです。さらにこの敵が

入ってきたという情報を、熱を上げるのに関わる様々な細胞のレセプターに結びついて、もっと熱を出させろと細胞に命令するのです。このような漢方生薬の成分の働きをアゴニストといいます。これを日本語では作動薬といいます。どうして作動薬と名付けられたのでしょうか？人間の免疫の働きの通りに作動するという意味でつけられたのです。もっと詳しく言えば、免疫の遺伝子をONにして作動させるという意味で名付けられたのです。残念ながら、免疫の遺伝子をOFFにしてしまうアンタゴニストの西洋新薬は金儲けのために徹底的に研究され続けています。それに反して、私たち同じDNAを持っている薬草の作動薬としての研究はほとんどされていないのです。なぜかというと、農産品である薬草によって全ての病気が治ってしまう恐れがあるからです。農産品は農業によって作られています、農業でお金が儲かる訳ではありません。だからこそ私たちは120万所帯程度の農民に対して、毎年一人一人の国民が25000円の農業を支える負担金を払っています。その合計は二千数百億円の巨大な額であります。それだけではありません。免疫を助ける漢方薬で病気が治ってしまうと、今度は医者が飯を食えなくなってしまうのです。

皆さんご存知だと思いますが、なぜ漢方が免疫を上げるかと言うコラムを書き続けています。今まだ未完であります。実は今ちょうど述べたばかりの結論を書くために書き続けているにすぎないのです。つまり漢方薬だけがアゴニスト（作動薬）の仕事をする唯一の薬であるということ、言い換えると漢方薬だけが遺伝子の命令に従順である薬であることを証明するために書こうとし続けているのです。簡単に結論を書くと面白くないので、西洋医学や中国医学の歴史を紐解きながら最後に結論として述べようとしたことを、ここにうっかり書いてしまいました。手の内をさらけ出してしまいました。すみません。

皆さん、英語でアンタゴニスティックという言葉をご存知ですか？このアンタゴニスティックという言葉の訳は敵対的であります。何に敵対的なのでしょう？まさに人間の免疫の遺伝子に対して敵対的であるのです。神なる遺伝子に敵対的であり続けてどうして病気が治りますか？逆に人間の命を守る免疫の遺伝子が傷つくばかりです。絶対的な存在であるにもかかわらず、金を儲けるために製薬メーカーと医学者は日夜研究を重ねているのです。資本主義が滅びない限りは金を儲ける医療は永久に続くでしょう。資本主義は正しくできる限り全ての人がたくさん儲けて、税金をたくさん払って国を豊かにするべきですが、病気を作って金を儲けることは断じて許されません。そう思いませんか？

最近の新聞でも、ノバルティスのディオバンという降圧剤が、狭心症や脳卒中を減らすという偽のデータを有名五大学の研究者が宣伝で使ったということで、告発されたということで世間が賑わっています。人間は健康を維持するために授かっているアゴニスティック（従順）な遺伝子の働きに対して、アンタゴニステ

イック（敵対的）な生活をするために、高血圧や糖尿病や高脂血症や肥満になってしまうのです。このような成人病も、まさに健康を維持してくれる遺伝子に対して敵対的な生き方をするからです。欲をかかないでストレスを減らし、食事は腹八分目にし、美味しいものを食べ過ぎず、さらに肥えすぎないようにすれば、年をとっても成人病などになる訳はないのです。例えば、糖尿病について言えば、人間の遺伝子が対処できる（アゴニスティックな）糖分の量が決まっているのに、それ以上の糖分を摂りすぎるので人間の遺伝子に対して敵対的になり、糖分会処理できなくてアゴニスティックな遺伝子の働きも力尽きて、仕方なく糖尿病にならざるをえなくなったのです。

去年116歳で死去した世界長寿ナンバーワンであった木村次郎右衛門さんの長寿の秘訣は何だったかご存知ですか？ただ一言「食べ過ぎない」ということです。食欲をコントロールできる人は、おそらく全ての欲望をコントロールでき、健康を維持できる遺伝子だけを発現させることができるのでしょう。食欲をコントロールすれば、強欲もないということですし、過量な食事を摂らない限りは糖尿病にもならないし、高脂血症にもならないし、肥満にもならないので成人病が生まれるはずがないのです。さらに欲のない人はストレスホルモンを出しすぎて免疫の遺伝子のみならず、全ての遺伝子の発現を無理矢理OFFにすることもなかったもので、膠原病にもならないし、かつ免疫が落ちることがないのでガンにもならなかったのでしょう。だからこそ木村次郎右衛門さんは116歳まで長生きできたのです。もちろん生まれつき長生きできる遺伝子をお持ちだったことでしょうが、これは遺伝子の多様性ですから仕方がありません。ちなみに116歳というのは、去年のギネスブックの世界長寿ナンバーワンであったのみならず、人類史の中で世界一であったことが保証されています。常々私も彼の生き方を見習いたいと思って努力しています。

一方、遺伝子の命令に従ってタンパク質を作り働く作動薬としての漢方薬の研究が遅々としてなぜ進まないのでしょうか？現代の医学技術を持ってすれば簡単に漢方生薬の成分を分析して、どのような漢方の成分が人体のセレプターに結びついてアゴニストとしての仕事をするのかは簡単に解明できるのです。しかしやればやるほど儲からないので遅々として進まないのです。残念です。「なぜ漢方薬は免疫を上げるのか」のコラムの中で現在までの漢方薬の研究で分かっているアゴニストとしての漢方薬をできるだけ詳しく最後に書くつもりですから、しっかり読んでください。製薬メーカーが作る薬は遺伝子の作動に敵対的に働く薬であり、漢方生薬は遺伝子の作動に従順に作動するものであると覚えておいてください。言い換えると、化学物質から免疫を上げる薬は絶対に作れないことも知っておいてください。）

Ⅷ、最後に

今回は、途中経過となっていました。これからも頑張って治療して行きたいと思えます。この手記を読まれて、これから松本医院にかかれる方で、半身半疑で不安かと思えますが、安心して受診して下さい。長々と拙い文章になってしまいましたが、最後まで読んで頂き、有難うございました。

(彼は現在元気よく就労しておられます。しかしながら100%彼の真面目すぎる他人志向型の生き方が膠原病、つまり巷にいわれる難病である自己免疫疾患のひとつであるクローン病になったわけですから、2ヶ月ばかり仕事を休んで治療に専念したところで、しかもまだ治りきっていないので、心のあり方が変わらない限りは、再び同じ状況が起こりえるということを彼に理解してもらいたいです。この真実は全てのクローン病や潰瘍性大腸炎の患者さんに伝えておきたいメッセージであります。とりわけ若い患者さんが多い自己免疫疾患といわれる病気のひとつですが、実はこの病気の端緒は、患者自身がストレスでステロイドホルモンを出しすぎて免疫を抑えたために、自分で作った病気であるということを知ってほしいのです。

天然の産物が全て放逐され、人工化学物質で都市文明が作られている21世紀においては、この化学物質から逃れることは不可能です。しかしこの化学物質とは最後は自分の免疫の発現により共存できるのです。クローン病をアトピー（アレルギー）に変えて、最後は自然後天的免疫寛容を起こして共存できるのです。こんな簡単な真実を私が見つけたのでノーベル賞をもらってもいい（???）と思えますが、誰も推挙してくれません。しかし私との出会いによって、若い人が希望ある人生を取り戻してくれることが私のノーベル賞です。毎日毎日私はノーベル賞をもらい続けています。患者の皆さん、ありがとうございます。ワッハッハッハ！本当のノーベル賞は、患者さん自身の免疫の遺伝子に対して授与されるべきなのですが。アッハッハ！

THさん、素敵な手記を本当にありがとうございました。)

2014/01/09